

大坂城跡 X

独立行政法人 国立病院機構大阪医療センターによる建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書



2009.1

財団法人 大阪市文化財協会

大坂城跡

X

独立行政法人 国立病院機構大阪医療センターによる建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書



2009.1

財団法人 大阪市文化財協会



大土壙SK03出土の陶磁器・土器類

大坂城跡 X

独立行政法人 国立病院機構大阪医療センターによる建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書



2009.1

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪を南北に貫く上町台地の北端は、古代には難波宮の壮麗な宮殿が営まれ、近世には豊臣秀吉が大坂城を築いて天下統一の覇業を成し遂げるなど、さまざまな時代でわが国の歴史が大きく動くときの舞台となってきた。大坂ノ陣で豊臣氏が滅んだのちも、大坂城は徳川幕府によって再建され、西国統治の拠点として重要な役割を果たした。また、流通や経済の中心となって江戸や京都と並ぶ大都市として繁栄し、「天下の台所」と称された。

本書は、2007年度に独立行政法人 国立病院機構大阪医療センター内で実施した発掘調査の報告書である。当地は難波宮の西部に当たり、豊臣氏大坂城期においては大名屋敷の存在が推定される地域である。次いで徳川氏大坂城期では大坂城に詰める武家の屋敷や町屋が軒を連ねていたと推定されている。1973年以来、大阪医療センターの前身である国立大阪病院の時期から行ってきた二十数次の発掘調査では、そうした遺跡に関する数々の遺構や遺物が見つかった。その成果は過去2冊の報告書などで公表している。

今回の調査では、徳川氏大坂城期の大規模な土壌が見つかり、多量の陶磁器・土製品などが出土した。陶磁器類は、産地や用途ごとに分類することによって当時の使用の実態を明らかにした。また土製品についても、既往の調査で出土した資料との比較検討を行い、時期的な特徴の把握に努めた。大坂で暮らす人々の当時の日常生活を生き活きと描き出すには、こうした実物資料の分析の積み重ねが不可欠であろう。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで種々のご尽力をいただいた独立行政法人 国立病院機構大阪医療センター、ならびに関係各位に心より御礼申し上げる。

2009年1月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人 大阪市文化財協会が独立行政法人 国立病院機構大阪医療センターの委託を受け、2007年11月6日～2008年1月25日に中央区法円坂二丁目で実施した発掘調査(NW07- 3次、NWは難波宮跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、独立行政法人 国立病院機構大阪医療センターの負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人 大阪市文化財協会 文化財研究部次長 南 秀雄、およびその指揮のもとで文化財研究部上席学芸員 藤田幸夫が主として担当した。
- 一、本書の執筆および編集は、南ならびに難波宮調査事務所長 趙 哲済の指揮のもと、主として藤田が行い、文化財研究部学芸員 市川 創が補助した。また第Ⅱ章第3節の記述については、陶磁器・土器類を同部学芸員 宮本佐知子、土製品類を同部学芸員 川村紀子、瓦磚類を同部主任学芸員 黒田慶一がそれぞれ担当した。第Ⅲ章については、第1節を宮本、第2節を川村が執筆した。英文目次は市川が作成した。
- 一、基準点測量および写真測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影した。遺物写真の撮影は楠華堂 内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの援助を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 調査次数に冠せられるアルファベットについて、NWは難波宮跡、OSは大坂城跡で、たとえばNW07-3次という調査は2007年度3番目の難波宮跡の調査であることを示す。各調査を示す場合、本文中ではNWを冠するが、位置図などではとくに断らないかぎり省略した。
2. 本書で用いた層序学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
3. 遺構名の表記は、堀・槽(SA)、堅穴建物・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壇(SK)、柱穴・ピット(SP)、その他(SX)の分類記号の後に、番号を付している。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mと記した。また、挿図中の示北記号は、図1・2は真北、それ以外は座標北を使用した。
5. 本書で用いた地層の土色および遺物の色調は、『標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。
6. 本書で使用する近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。

豊臣前期	本願寺焼亡より、大坂城三ノ丸の築城が開始される1598(慶長3)年まで
豊臣後期	三ノ丸築城より、大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川氏大坂城期(徳川期)	大坂夏ノ陣以降

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1) 調査に至る経緯	1
2) 調査の経過	2
第2節 周辺における既往の成果	4
1) 病院敷地内での調査	4
2) 難波宮跡の調査	5
3) 大坂城跡の調査	5
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
第2節 遺構	9
1) 古代の遺構	9
2) 徳川期の遺構	9
i) 大土塙SK03の検出状況	ii) SK03内の地層堆積状況
3) 明治時代以降および時期不明の遺構	13
第3節 遺物	15
1) 陶磁器・土器類	15
i) 下層の陶磁器・土器	ii) 上層の陶磁器・土器
iii) 時期と特徴	
2) 土製品類	34
i) 分類方法	ii) 土人形
iii) 飯事道具	iv) 箱庭道具
v) その他	
3) 瓦埴類	43

第Ⅲ章 遺物の検討	51
第1節 SK03下層出土遺物の数量的傾向	51
1)はじめに	51
2)陶磁器・土器の分類	51
3)用途ごとの分類	52
4)まとめ	53
第2節 土製品類について	54
1)今回の調査成果	54
2)既往調査との比較	55
3)まとめ	55
第Ⅳ章 まとめ	57
引用・参考文献	59
あとがき	
索引	
英文目次	

※表紙の文様は、徳川中～後期の代表的なモチーフの1つである蛸唐草文を意匠化したものである。

原色図版目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 SK03下層の陶磁器・土器類(1)</p> <p>上: 肥前磁器 碗(1)</p> <p>下: 肥前磁器 碗(2)</p> <p>2 SK03下層の陶磁器・土器類(2)</p> <p>上: 肥前磁器 碗(3)</p> <p>下: 肥前磁器 皿</p> <p>3 SK03下層の陶磁器・土器類(3)</p> <p>上: 肥前磁器 鉢</p> <p>下: 肥前磁器 小杯・猪口</p> <p>4 SK03下層の陶磁器・土器類(4)</p> <p>上: 肥前磁器 仏飯器</p> <p>下: 肥前磁器 香炉</p> <p>5 SK03下層の陶磁器・土器類(5)</p> <p>上: 肥前磁器 瓶</p> <p>下: 肥前磁器 蓋</p> | <p>6 SK03下層の陶磁器・土器類(6)</p> <p>上: 京焼系陶器</p> <p>下: 瀬戸美濃焼陶器</p> <p>7 SK03下層の陶磁器・土器類(7)</p> <p>上: 焼締陶器(備前焼・丹波焼・堺搦鉢)</p> <p>下: 土師器・軟質施軸陶器</p> <p>8 SK03出土の土製品類</p> <p>上: 土製品類集合</p> <p>下・左上: 土人形(人物)</p> <p>下・右上: 土人形(動物)</p> <p>下・左下: 飯事道具</p> <p>下・右下: 箱庭道具</p> <p>9 既往の調査出土の土製品類</p> <p>上: 難波宮跡(NW81-1次)出土の土製品類</p> <p>下: 難波宮跡(NW93-4次)出土の土製品類</p> |
|--|--|

図版目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 調査区全景</p> <p>上: 大土壙SK03掘削前(南から)</p> <p>下: 大土壙SK03掘削後(南から)</p> <p>2 大土壙SK03地層断面(1)</p> <p>上: SK03西アゼ東壁北半部(西から)</p> <p>中: SK03西アゼ東壁南半部(西から)</p> <p>下: SK03西アゼ西壁部分(東から)</p> | <p>3 大土壙SK03地層断面(2)および遺物出土状況</p> <p>上: SK03中央アゼ西壁(西から)</p> <p>中: SK03東アゼ西壁(西から)</p> <p>下: SK03遺物出土状況</p> <p>4 出土遺物(1)</p> <p>上: SK03上層出土の陶磁器・土器類</p> <p>下: 近世墓出土の副葬品(NW93-12次出土)</p> <p>5 出土遺物(2) - 瓦埴類</p> |
|---|---|

挿 図 目 次

図1	難波宮跡・大坂城跡の位置	1	図19	陶磁器・土器類実測図(9)	29
図2	大坂城跡と周辺の遺跡	2	図20	陶磁器・土器類実測図(10)	31
図3	調査地の位置	3	図21	陶磁器・土器類実測図(11)	32
図4	地層と遺構の関係	7	図22	陶磁器・土器類実測図(12)	33
図5	上町層柱状図	7	図23	土製品類の組成	34
図6	調査区西壁断面図	8	図24	人物の組成	35
図7	遺構平面図	10	図25	土製品類実測図(1)	36
図8	遺構平面図(南半部)	11	図26	動物の組成	37
図9	SK03断面図	12	図27	土製品類実測図(2)	38
図10	SK02実測図	14	図28	土製品類実測図(3)	40
図11	陶磁器・土器類実測図(1)	16	図29	飯事道具の組成	41
図12	陶磁器・土器類実測図(2)	18	図30	箱庭道具の組成	41
図13	陶磁器・土器類実測図(3)	20	図31	その他の組成	42
図14	陶磁器・土器類実測図(4)	21	図32	出土瓦実測図(1)	44
図15	陶磁器・土器類実測図(5)	22	図33	出土瓦実測図(2)	45
図16	陶磁器・土器類実測図(6)	24	図34	陶磁器・土器の産地別・用途別集計	53
図17	陶磁器・土器類実測図(7)	25	図35	土器類と土製品の組成比	55
図18	陶磁器・土器類実測図(8)	27			

表 目 次

表1	大阪医療センター構内における調査一覧	6	表3	周辺遺跡出土の陶磁器・土器の産地別比率	51
表2	土製品類観察表(1～3)	47～49			

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1) 調査に至る経緯

難波宮跡における発掘調査は、1954(昭和29)年に山根徳太郎博士を中心とした難波宮址研究会によって実施されたことを嚆矢として、以来50有余年にわたって大阪府教育委員会・大阪市教育委員会を事務局として、現在の難波宮跡公園を中心とした内裏・朝堂院地域やその周辺で実施されてきた。

その結果、中軸線をほぼ等しくする前後2時期の宮殿跡があることが確認された。

その内、前期難波宮の建物は掘立柱建物で、瓦を使用しない構造である。また、柱の抜き取り穴から焼土・焼壁が出土するなど火災痕跡を有する建物が多い。この前期難波宮については、孝徳朝の難波長柄豊碯宮まで遡るとする見解が支配的である。

一方、後期難波宮は、中心的な建物には基壇を築き、礎石上に柱を立て、屋根には瓦を葺く構造で、時期は聖武朝である。主要な建物は、後に長岡宮に移築された。

今回の調査地である独立行政法人国立病院機構大阪医療センター（以下、大阪医療センターと略表記する）の敷地は、前期・後期難波宮の内裏・朝堂院地域の西側に位置する。この地は難波宮西方官衙が所在したと推測される箇所である。

また、1959(昭和34)年には「大坂城総合学術調査」[大阪城天守閣1984]が実施され、現大坂城が徳川氏再建の大坂城であることが、明確にされた。この調査の際に見つかった天守台地下7.3mの石垣は、後のボーリング調査で豊臣氏大坂城の本丸石垣遺構であることが確認された。



図1 難波宮跡・大坂城跡の位置

その後、発掘調査を重ねて、豊臣氏大坂城、徳川氏大坂城に関する知見が蓄積されていった。

大阪医療センター構内は豊臣氏大坂城三ノ丸で、徳川氏大坂城期には奉行の屋敷地であり、それぞれの時期の遺構検出が予測される地点である。

昭和52年に大阪市教育委員会と当時の国立大阪病院との間では、構内の埋蔵文化財の調査について覚書を取交し、以後、その覚書の趣旨に基づいて調査が行われている。

これまでの調査では、難波宮の柱穴や近世の遺構などが検出されている。

今回敷地内で施設の建設工事が行われることになり、それに伴って発掘調査を実施した。なお、調査対象面積は786㎡である。

2) 調査の経過

調査に際しては、当協会学芸員が立会いのもと近代以降の堆積層の重機による掘削を事業者側が実施し、残土は場外に搬出した。その後、近世以前の堆積層については人力で掘削することとし、2007(平成19)年11月6日から開始したが、予想以上に深くまで近代以降の攪乱があり掘削量は多くなった。その際に発生した残土は、調査区外周に仮置きした。また、調査区内には現在も機能している下水管やマンホールが存在していたため、それらの施設に近接する箇所での掘削は最小限に留めた。

調査地の北半は明治時代以降の大規模な改変を受けており、古代の土壌1基と時期不明の土壌1基



図2 大坂城跡と周辺の遺跡(2008年12月現在)

のほかは顕著な遺構は見られなかった。南半の大部分は、徳川期の大土壌が占めていた。この大土壌からは第Ⅱ章で報告するように多量の陶磁器などの遺物が出土した。

人力掘削と並行して適宜記録作成、写真撮影などを行った。調査地全体の平面図は写真測量によって作成した。現地での作業を終了したのち、機材・資材を撤収し、発掘調査を完了したのは、2008(平成20)年1月25日である。

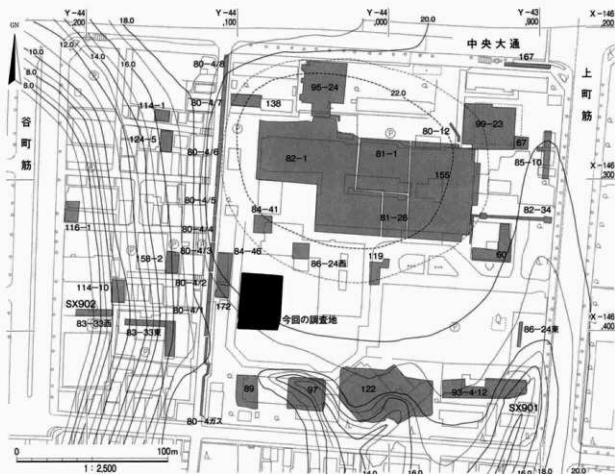


図3 調査地の位置(等高線は地山(上町筋)上面の推定標高)

第2節 周辺における既往の成果

1) 病院敷地内での調査

大阪医療センター敷地内での発掘調査は、1973年度以来実施してきており、今回の調査で25次となる。過去の調査は表1のとおりで、その結果については『難波宮址の研究 第八』、『難波宮址の研究 第十二』ほかで報告されている[大阪市文化財協会1984・2004]。

この大阪医療センター敷地は、難波宮の後は豊臣氏大坂城三ノ丸となり、その後、徳川氏大坂城期には勘定奉行支配下の蔵奉行と大坂定番支配下の金奉行・具足奉行の屋敷があったとされる。

さらに明治に至って大阪鎮台設置後には、野戦砲兵第4連隊、歩兵第8連隊・第20連隊・第37連隊などの陸軍関係兵営地として利用され、その後、1947(昭和22)年に国立大阪病院が当地に移転したのである。

これまでの調査の結果によると、旧軍時代の施設建設や国立大阪病院(当時)の建設によって攪乱を受けており、特に明治時代の軍関係施設建設時に大規模に地形が改変されている箇所があることが判明している。

さらに、徳川氏大坂城期後期の土採り穴と思われる大土壌が複数存在するなどして、地山面の高い箇所では江戸時代より前の遺構の残存状況はよくなかった。

一方、難波宮造営以前には敷地の南・東に谷があり、南側へ低くなっていくことが確認された。この谷は、最終的には後期難波宮の造営に際して埋立てられたことが判明している。

今回の調査地も敷地内のやや南に位置することから、谷を検出する可能性が想定された。

このように大阪医療センター構内における古代の遺構の遺存状況は良好とはいえないが、これまでの調査では、難波宮の柱穴や井戸などの遺構を検出している。

以下ではこれまでの調査のうち、本調査地の近隣で行われた3件について簡単にふれる(図3)。

第97次調査：谷状の地形が確認された。谷の埋積土から5世紀中葉～7世紀後半の遺物が出土した。その上に難波宮期の布目瓦を含有する後期難波宮造営時の盛土層が認められた。その上に、難波宮廃絶後の整地層が見られるなど、各時期の地層が比較的良好に残存していた。

第122次調査：第97次調査と同様の谷を検出する。この谷は、後期難波宮造営時に埋立てられている。また、豊臣氏大坂城期の石組遺構、V字溝を検出した。

NW82-1次調査：I区～V区に分けて調査を実施した。その内、I区の南北端は良好に地山が遺存していたが、江戸時代の大土壌が調査地の大半を占めていた。この大土壌の底面で、江戸時代後半の溝を検出した。I区～V区では、地山面が高く遺存しているところではTP+20mであり今回の調査地と等しいが、江戸時代より以前の遺構は検出されなかった。また、江戸時代の建物遺構は地下室のみで、明治以降に地表面が改変されたことが窺えた。

また、中央大通を挟んで北に位置する旧大阪市中央体育館敷地(現NHK・大阪歴史博物館)で大規模な発掘調査を実施し、それらの調査で難波宮の遺構が数多く検出され、遺構の配置状況が明らかになっ

た[大阪市文化財協会1992]。このこともあって、大阪医療センター敷地内における難波宮期の建物の配置状況がますます注目される場所である。

2) 難波宮跡の調査

前節で述べたように、難波宮跡の発掘調査は50有余年を数える。その間、発掘調査の成果を基にして、史跡指定がなされた。史跡指定は1964年に第1次指定、続いて1976年に第2次指定され、その合計面積は約90,000㎡となり、その内、中央大通より南側の約66,600㎡が難波宮跡公園として整備されてきた。その後、周辺の発掘調査の進捗により史跡の追加指定が数度されて、総面積約13万㎡が史跡として指定された。

発掘調査開始当初は、中央部の調査が主であり、前・後期の内裏・朝堂院の構造などが明らかになっていった。

その後、朝堂院の南方で行われた調査で、前期難波宮「朱雀門」(宮城南門)・朝集殿が見つかった[大阪市文化財協会2004]。朝堂院の東側では前期難波宮の楼閣状の建物を含む建物群とそれらを囲う回廊[大阪市文化財協会2008a]が見つかった。一方、内裏西方官衙では前期難波宮並び倉を含む倉庫群とそれらを取り囲む櫓が検出された[大阪市文化財協会1992]。また、大阪医療センターの南側で実施したNW06-2次調査では、第122次調査で検出した谷の続きを検出した。調査地の関係で谷内の発掘は小面積であったが、万葉仮名文が書かれた木簡が出土した[大阪市文化財協会2007]。

このように、前・後期難波宮に関する新しい発見が続いており、大阪医療センター内における難波宮の遺構配置がますます注目される場所である。

3) 大坂城跡の調査

大坂城跡の本格的な調査は、前節でも述べたように、昭和34(1959)年の「大坂城総合学術調査」を端緒とする。この調査で、本丸部分では徳川氏大坂城の地下に豊臣氏大坂城が存在することが確認された。

また、豊臣氏大坂城三ノ丸の規模や構造については長らく議論されてきた。種々の論議が交わされたが、1981年、渡辺武氏は「臺台武鑑」所収の「大坂冬の陣配陣図」をとりあげて、具体的な規模・構造を提起した[渡辺 武1981]。その後、三ノ丸については、発掘調査による発見が相次ぎ、大阪城野外音楽堂建設に伴ったNW153次・162次調査で石垣を確認した[大阪市文化財協会2002]のをはじめ、随所で三ノ丸外郭と考えられる遺構が検出されている。

旧大阪市中央体育館敷地での調査では、建物や堀・溝など多くの区画施設が見つかっており、それらの分析から大名の屋敷地が復元されている。今回の調査地である大阪医療センターの敷地はその南に位置する。屋敷地であったことを示す建物跡は残っていないが、各所から豊臣期の金箔瓦が出土し[宮本佐知子2003]、井戸や土塼といった遺構が見られるなど、旧中央体育館敷地と同様に大名の屋敷地が存在した可能性が高い。

表1 大阪医療センター構内における調査一覧

番号	調査回数	調査箇所	調査期間	調査面積 (㎡)	担当者	報告*	調査成果の概要
1	立会調査1	図書館	1973.2.21	75.0	長山雅一	第八	地表下1.3mで地山、古代の遺構なし。
2	立会調査2	図書館建設に伴う ガス管移設	1973.5.26～ 1975.1.14	21.0	八木久栄	第八	地表下1.2mまで近代の埋積層。
3	60次	救急透析センター	1974.6.7～ 6.18	123.0	中尾芳治	第八	地表下2.5mで地山、上層は徳川期 末以降の整地層、旧軍時代に削平。 古代の遺構なし。
4	67次	視能訓練学院	1974.12.9～ 1975.1.14	79.0	中川信作	第八	地表下2.0mで地山。直上には古代? の整地層が薄く残る。
5	89次	母子医療センター	1976.2.16～3.31	435.0	木原克司	第八	東端に宮造営前の谷。
6	97次	母子医療センター	1976.7.10～ 9.9	600.0	木原克司	第八	後期難波宮造営時に埋立てられる 谷。
7	119次	自家発電機室およ びラジウム貯留槽	1976.7.19～ 7.13	100.0	木原克司	第八	地表下2.0mで地山。直上は徳川後 期の整地層、古代の遺構なし。
8	122次	看護学校および 宿舍	1977.7.14～ 10.31	1,200.0	木原克司・ 中川信作	第八	後期難波宮造営時に埋立てられる 谷。
9	138次	公務員宿舍	1978.6.24～ 7.8	145.0	木原克司	第八	地表下0.35mで地山、地山直上は 一部徳川中期の整地層が認められ るが、大半は徳川期末以降。古代 の遺構なし。
10	155次	新外来・治療棟	1979.5.7～ 10.11	3,000.0	木原克司・ 松尾信裕	第八	地表下1.5mで地山。後期難波宮の 柱穴・井戸、宮以前の溝。
11	172次	医療排水施設	1980.2.9～ 2.23	87.0	永嶋暉臣	第八	北区：徳川～明治期の溝を検出。 古代の遺構はない。南区：東側は 地表下0.5mで地山、難波宮造営 以前の建物柱穴。
12	80-12次	関電ケーブル敷設	1980.12.5～12.11	16.5	藤田幸夫	第八	後期難波宮の柱穴・溝。
13	81-1次	新外来・治療棟	1981.4.30～ 7.11、8.10・11	450.0	黒田慶一	第八	古代の遺構・包含層は検出されず。 徳川期に削平か。
14	81-28次	新治療・病棟	1982.2.3～3.16	1,150.0	八木久栄	第八	西半：徳川後期の土壌。東半： 徳川中期の井戸・土壌、地山は 旧軍時代の整地層。
15	82-1次	新治療・病棟	1982.3.23～ 8.31	2,847.0	藤田幸夫・ 黒田慶一	第八	徳川後期以降の土壌群。地山は 近代の整地層。難波宮の遺構なし。
16	82-34次	特高ケーブル敷設 工事	1982.9.16～10.5	100.0	藤田幸夫	第八	第1トレンチ：地山直上は明治時 代以降の整地層。第2トレンチ： 難波宮期の土壌、地山は難波宮 の整地層。
17	84-41次	建設工事(第9期)	1984.11.12～ 12.5	330.0	宮本佐知子	第十二	旧軍時代の建物のため、古代の遺 構・包含層は検出されず。
18	84-46次	R1貯留槽設備 工事	1984.12.4～ 1985.1.5	156.0	宮本佐知子	第十二	難波宮造営前の建物2棟。
19	85-10次	改築工事	1985.5.27～ 6.10	175.0	宮本佐知子	第十二	後期難波宮の建物1、溝2を検出。
20	86-24次	高エネルギー棟 増築工事	1986.8.6～9.30	344.0	宮本佐知子	第十二	2箇所で調査。東：難波宮以前の 柱穴、難波宮の柱穴。
21	93-4次	建設工事	1993.6.7～9.30	345.0	清水 和	第十二	難波宮造営前の建物、前期難波宮 建物・溝。
22	93-12次	建設工事 (第2期工事)	1993.10.1～ 12.22	470.0	清水 和・ 南 秀雄	第十二	同上。
23	95-24次	備蓄庫及び受水槽 整備等工事	1996.3.18～ 4.26	904.0	黒田慶一	大文協 1999	地山は近代以降の整地層、旧軍 時代に削平される。意匠、徳川期 の深い土壌以外は検出せず。
24	99-23次	建設工事	2000.2.1～4.26	1,013.0	黒田慶一・ 李 陽浩	大文協 2000a	南半は地山が、明治時代以降の 整地層。前期難波宮柱穴4(建物 2?)、古代の溝2。
25	07-3次	建設工事	2007.11.6～ 2008.1.25	786.0	藤田幸夫	本書	明治時代以降の攪乱が多い。南半 分には徳川期の土壌。

*「第八」などは「難波宮址の研究」第八の略。「大文協○○」とした大阪府文化財協会の各報告書を参照のこと。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

調査地は、明治時代以降に造営された旧軍関係の施設や国立大阪病院(当時)によって、大きく改変されていた。特に地山面が本来高かったと想定される北側において、その状況は顕著である。また、中央から南にかけては後述する大土壌SK03が存在する。このSK03の上面も明治時代以降に攪乱されていた。したがって、SK01とSK03の埋土を除いて、明治時代より古い堆積層は見られなかった。

以下では、調査地西壁の知見を基に記述する。

第0層：近代以降の堆積層である。最も薄いところで層厚50cmである。

第1層：SK03の埋土である。上層を第1a層、下層を第1b層、最下層を第1c層とする。

第1a層：暗褐色(10Y3/3)細粒砂質シルトで最も厚いところで層厚120cmである。

第1b層：黒褐色(10Y R3/1)細粒砂質シルトで層厚は約80cmである。

第1c層：褐色(10Y R4/4)細粒砂質シルトで層厚は約20cmである。

第2層：オリーブ灰色(10YR5/2)を基調とし、砂礫～シルトを主体とする当地域の地山層であり、上町層中部の上半部に当る。調査区の西壁中央付近では、TP+18m以下に砂礫が分布し、その上位は一部で粗粒砂層を挟んでいたが、ほとんどは細粒砂～シルト層であった。1980年代の調査で現病棟の地下の上町層に観察された果穴の化石は認められなかったが、TP+18.1～18.7mには、干潟堆積物とみられるリズミカルな砂泥互層が分布した。

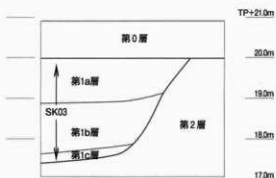


図4 地層と遺構の関係

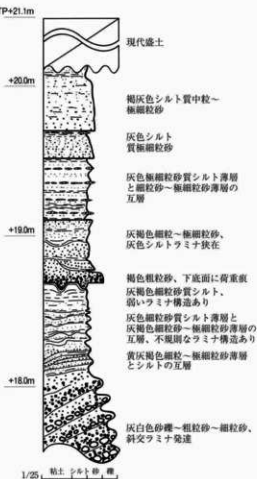


図5 上町層柱状図

第2節 遺構

1) 古代の遺構(図7)

SK01 調査区北端部で検出した土壌で、埋土中から土師器の細片が出土した。現代の下水管によって攪乱されているために正確な形状は不明であるが、現状では東西3.5m、南北0.5mを測り、検出面からの深さは最大で0.2mである。埋土は浅黄橙色(10YR8/4)シルトで、埋土から考えて難波宮下層遺跡の土壌と思われる。

2) 徳川期の遺構

i) 大土壌SK03の検出状況

大土壌SK03は、調査地のほぼ南半分に構築されている(図7)。この土壌は明治時代から現代に至る時期に攪乱され、特に中央部は広い範囲で土壌の底部以下まで攪乱されていた。この土壌の上面はレンガを含む層が覆っており、上部は明治時代以降に削平されていると思われる。したがって、本来はさらに深かったと想定できる。

先に述べたように、調査区西南部で土壌の南肩を検出したが、それ以外の場所は攪乱されており、土壌の南端を検出したのは一部である。東西両端についても調査区内では確認できず、土壌はさらに調査区外に広がるため、今回の調査においてはSK03の北端、および南端の一部を確認したのみである。北側の肩部の形状は傾斜して最終的に垂直に近くなり底部に至るところと、不規則な段差状で下がる箇所が存在する。また、一部には明確な階段状の施設が認められる。この階段状の施設は一部が攪乱されているが、地山を削りだして三段分造成しており、一段分の高さは、0.15m～0.30mである(図8・9)。その幅は約1m残存しており、攪乱されている範囲から考えて、最大でも2mほどの幅であったと思われる。

また、土壌底部は平坦でなく、凹凸が見られる。凹凸は1.0m×1.5m前後の不整形な小土壌状を呈するものが多く、大きいものは2.5m×3.5mの長円形を呈す。これらの小土壌状のものは不規則に存在するが、東端部では直線状を呈する落ち込みが見える。これらの小土壌状のものは、SK03掘削時に掘削されたものであろう。

以上のことから考えて、SK03は土探りを目的として掘削されたものと考えられる。この穴から採取された土は粘土質ではなく砂質で、後述するSK810163と同様である。北側に見られる階段状の施設は、土探り作業のために造り出されたものであろう。土探り後にその穴を埋め立てたのであるが、一定の期間、塵芥捨て場として機能して、徐々に埋め立てられていって上面が平坦化されたことが想定される。その期間は、出土した陶磁器から18世紀後半～19世紀初頭までの間と考えられる。

同様の土探り穴は、これまでの大阪医療センター内での調査においてはNW81-1次調査のSK810163や[大阪市文化財協会1984]、NW81-28次調査のSK812861、NW99-23次調査のSK101が検出されており、比較的地山面の高い敷地中央より北に分布している。なおSK810163の規模は東



図7 遺構平面図

西27.5m、南北11.5mと大規模である。

SK03は現在確認できるところで、東西23m以上、南北11m前後、深さは現状では2m前後で、その面積は約253㎡以上、体積は506㎡以上となり、SK810163に匹敵する規模を有する。

ii) SK03内の地層堆積状況(図9)

今回の調査では、SK03の埋土の状況を知るために東西それぞれの壁面際とともに、攪乱が少ない箇所を選んで、アゼを3箇所を設定し、埋積状況の確認に努めた。先述のとおり中央部をはじめかな

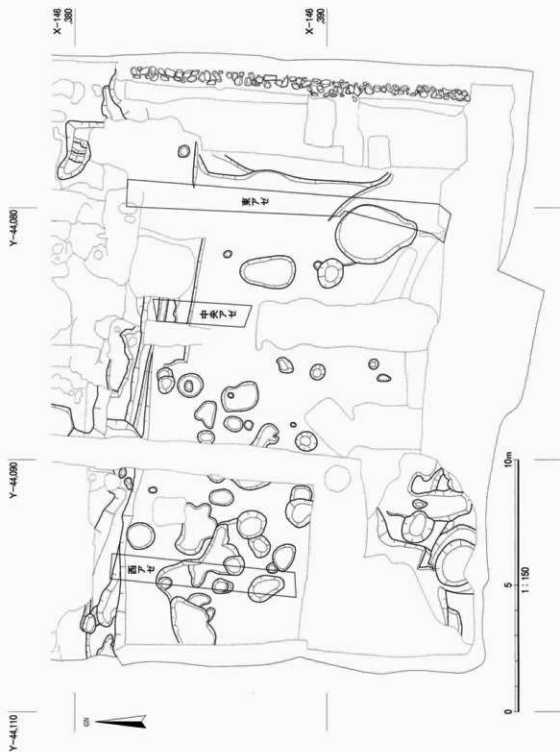


図8 遺構平面図(南半部)

第II章 調査の結果

り大きく攪乱されていたため、東西方向に連続するアゼを設定することは不可能であった。しかしながら各アゼのそれぞれの層について大まかな対比が可能であったため、遺物の項も各地区の上層(第1a層)、下層(第1b層)に2分して記述する。

中央アゼ西壁断面図における上層はオリープ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルト層を主とし、下層は黒

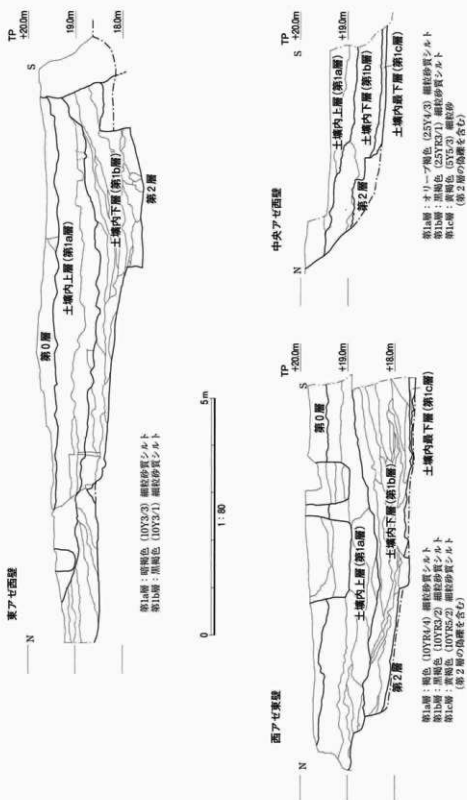


図9 SK03断面図

褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト層で、最下層は灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂であり、オリーブ灰色(10Y5/2)細粒砂の地山偽礫を含む。

西アゼ東壁の上層は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトを主とし、下層は黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトを主とする。なお、最下層は黄褐色(10YR5/8)細粒砂で、地山偽礫を含む。

東アゼ西壁の上層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトを主とし、下層は黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトである。この壁面では最下層は見られない。

調査区西壁断面における上層は暗褐色(10Y3/3)細粒砂質シルトを主とし、下層は黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルトを主とする。最下層は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトである。

ただ、土採り穴を廃棄壕として使用し、順次埋立てていったと理解するならば、西部や東部の下層がまったく同時に堆積したとは、断定できないと思われる。遺物は、上下両層から多量に出土したが、上層より下層の方が多い傾向が認められた。ただし、一部に認められる基底部近くの層(最下層)は遺物を含まない。基底部付近に見られる細粒砂層は、土採り直後に、底をある程度均らした結果による堆積層と考えられるため、この層より上層が廃棄壕の埋土である。

3) 明治時代以降および時期不明の遺構

今回の調査で検出したもののうち、特徴的なものを取り上げる。

SB01 調査区の東端で検出したもので、建物の基礎部分である。南北約13m分を確認した。幅約0.5m、深さ0.5mの溝を掘り、両側面には厚さ約5cmの漆喰を貼る。内部には石と砂を充填している。この基礎は調査区外へ延び、北端部は東へ折れ曲がるのであろう。同じ構造は、第138次調査で検出したSB13881や第155次調査のSB15581に見られ、今回検出したものも旧軍関係の建物基礎であろう。SB15581は、地山上面と大土壌上をまたいで構築され、地山上面の基礎は今回検出の基礎と同じ構造であるが、土壌の埋土上は周囲を溝状に大きく掘り、栗石を約0.5mの厚さに敷いた後、切石を2段並べるなどして地下の状態によって異なっている。しかし、**SB01**については地山上も土壌埋土上も同じ工法で基礎を構築している。

SK02 調査区の中央部で検出した土壌で、南半は攪乱されている(図10)。内部に人頭大の石を詰めている。それらの石の中には蓮弁が彫られているものがあり、石製塔の基礎部分であろう。この土壌は伴出遺物がないため時期は不明である。現状は南北1.4m、東西2.2mで、深さは約0.7mを測る。埋土は黒褐色(5YR2/1)シルト質細粒砂で、明治時代以降の堆積土に似るが、レンガは含んでいない。

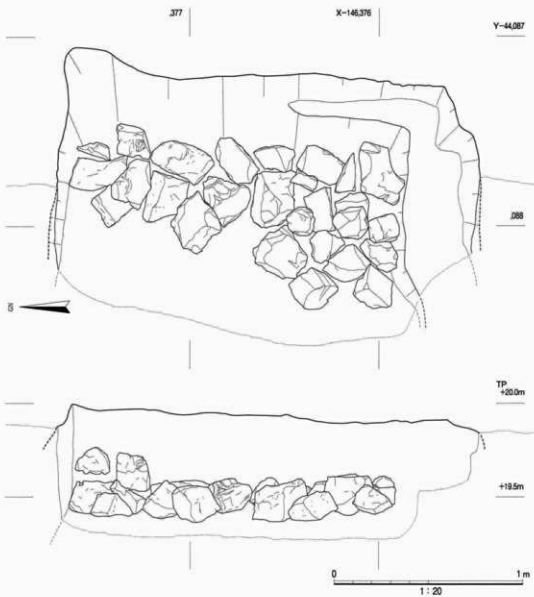


图10 SK02实测图

第3節 遺物

1) 陶磁器・土器類

SK03の埋土は大きく上層と下層の2層に分けられる。ともに多くの陶磁器・土器が出土した。本報告では、上層・下層が明確に分層できた中央アゼより西側(西部)の遺物を報告する。

i) 下層の陶磁器・土器

肥前磁器1～84

1～38は碗で、染付・白磁・青磁・青磁染付・色絵がある。

1・2は半球形の体部に小さく低い高台が付く染付の碗で、1は薄手で外面には菊花氷裂文を描く。2は外面2箇所に若松を描いた粗製の碗である。3は薄手で高台が小さく低い染付碗で、外面には唐子の絵と、口縁部付近の内外面に連続した同じモチーフの如意頭文を描く。地の白色が、ほかの染付とは異なり、光沢がある。4はやや腰の張った染付碗で、復元すると外面の3方に丸文の中に三葉葵の家紋が描かれている。5は底部の器壁が厚い染付の丸碗で、外面の文様は松竹を1箇所に、相対する面には梅を描いている。高台にアルミナが付着している。6は色絵碗で、体部外面に赤色の文様がかすかに残る。小型であり小杯の可能性もある。7は小さな低い高台に腰の張った染付碗で、文様は体部外面の2箇所に山と松を描く。1つの山と2本の松と、3つの山と3本の松とが対面の位置にあり、文様に強弱が付けられている。8は薄手の染付碗で、体部外面の文様は、斜格子の中に草花を描いた丸文の区画と、その区画間に宝と雲文を描いたものが各3単位ずつ描かれている。9は内外面に菊花氷裂文を染付した丸碗である。10は色絵碗で、外面文様は宝物を散らし描きにし、間の相対する面に窓絵の中に柘榴を、高台外面には○×文を赤色で描く。底部内面にも一枝の花を描く。11は染付碗で、文様は外面に2重網手文を、内面も1重網手文を描く。底部内面には2重圏線の中に花を描き、高台内にも文様がある。12～15は内外面にていねいに染付された碗で、蓋付きになる可能性が高い。口縁部付近の内面には四方標文などの連続文を、底部内面には2重圏線の中に文様を描いている。外面は全面に文様を描き、高台外面には圏線を、内には14と15に「富貴長春」の銘款がある。12の外面の文様は唐草を散りばめて4方に窓絵を置き、その中に柘榴を描いている。13は腰張の碗で、外面文様は高台近くまで蛸唐草文を描いている。14の外面文様は4つの区画に菊と、虫と葉を交互に配している。口縁部付近には圏線の間に花と葉を帯状に描く。15の文様は松竹梅の間に花を描いた丸文を3方に描いている。16も染付碗で、外面文様は蛸唐草文で、底部内面には2重圏線の中に環状松竹梅文を描く。17・18ともに器高の低い粗製の白磁端反碗である。底部内面は蛇目釉剥ぎしている。17は体部外面に数条の沈線を巡らせてから施釉している。19も粗製の端反碗で口縁部の内面とその下、口縁部外面の下に薄い圏線を引いただけの染付碗である。底部内面は蛇目釉剥ぎしアルミナを塗布している。20は朝顔形の碗で、体部外面の文様は相対する位置に草花文を、高台と高台際から体部になるところに各々2重の圏線を引いている。高台内には角「福」が退化した銘がある。口縁部内面付近には四方標文が、底には2重圏線内に五弁花のコンニャク印判を押している。21は粗製の染付碗で、体部外面の



图11 陶磁器·土器類実測図(1)

文様は橋と草花文で、体部の約半分の位置に描き、残りには文様がない。22は粗製の染付碗で、体部外面の文様は全域に草花を簡単に描くが、文様の中には多くの花とつぼみ・草を描いている部分と、つぼみと草だけのところがあり、文様に主文様と従文様の区別をしている。底部内面は蛇目軸剥ぎしアルミナを塗布している。23も粗製の染付碗で、体部外面の文様は1箇所に草花文を大きく描き、対面には花卉文を1輪だけ描いている。下半から高台に3本の圈線を描く。高台内周囲にも太い圈線がある。底部内面は蛇目軸剥ぎしてアルミナを塗布している。24～26は大ぶりの粗製の染付碗で、文様は体部外面の約半分に簡単な草花文を描く。24・25の反対側には文様はない。26は反対側に雁2羽を描き、下半から高台に3本の圈線を描く。高台内には方形の枠内に渦「福」、底部内面には2重圈線の中に五弁花のコンニャク印判を押している。24・25の底部内面は蛇目軸剥ぎし、アルミナが塗られている。27も粗製の染付碗で草花文を体部全域に簡単に描く。1箇所に文様の中心がある。高台端部は露胎にしてそこにアルミナが付着している。高台内には退化した「大明年製」が書かれている。28も粗製の染付碗で、文様は体部外面の1/3に草花文を描く。高台内には退化した「大明年製」が書かれている。29は大ぶりの粗製の碗で体部半分に草花文、反対に鳥のような絵を描く。高台内には「大明年製」とは読めないものが書かれている。底部内面には2重圈線の中に五弁花のコンニャク印判が押されている。30・31は陶胎染付の碗で、30の文様は体部外面の口縁部付近に雲文の連続文が2本の圈線の間に描かれている。体部には1箇所に山水樓閣文と、反対の位置に山水文の図が描かれている。高台端部は露胎で、アルミナが付着している。31の文様は体部外面に大きく山水樓閣を描き、対面には雲と月が、高台と高台際には3本の圈線が廻る。高台端部は露胎で、アルミナが付着している。32は青磁染付の碗で、口縁部内面付近に四方樺の連続文様があり、底部内面も2重圈線の中に文様がある。33は青磁染付の筒形碗で、口縁部内面付近に連続文様があり、底部内面も2重圈線の中に文様がある。高台は2段で、高い外側は端部が露胎になっている。高台内には2重方形枠内に渦「福」が書かれている。34は青磁染付碗で器高が低い。内面は口縁部付近に連続した雲文を描き、底面は蛇目軸剥ぎしてコンニャク印判の五弁花を押す。赤色顔料が付着しているので紅皿に使用したものかも知れない。35は青磁染付の筒形碗で、口縁部内面付近には四方樺文を、底面には2重圈線の中に五弁花のコンニャク印判を押している。36は筒型の染付碗で、体部外面に蛸草文を、口縁部内面付近には四方樺文、底面には2重圈線の中に文様を丸くまとめて描いている。37は青磁染付碗で、口縁部内面付近には四方樺文を、底面には2重圈線の中に花と葛の文様を丸くまとめている。高台内には方形枠内に角「福」が書かれている。38も青磁染付碗で、口縁部内面付近には連続文様があるが、にじんで何が描かれているのかわからない。底面にはにじんだ2重圈線の中に丸く文様をまとめている。高台内には2重方形枠内に「筒江」を崩したものが書かれている。

39～49は皿である。染付と色絵がある。

39・40は色絵小皿で、39の文様は底部内面を蛇目軸剥ぎし、その上から黒の3重圈線の中に花卉文を描き、その上にアルミナが付着している。その周囲には赤で唐草を上絵付けしているが、これらはほとんど消えて痕跡だけが残っている。40は蛇目軸剥ぎしたところに赤色を塗っている。41は色絵皿で、文様は底部内面にうちわを黒い線に黄色の色を付けて描き、その周囲に赤で花を描いている。高



图12 陶磁器·土器類実測図(2)

台は蛇目凹型高台である。42は色絵輪花皿で、内面には中に花や樺文を描いた丸文を染付と色絵で描き、口縁部付近には染付と色絵で四方樺文を交互に連続して描いている。外面体部も染付で花唐草を描き、高台際には2重圏線の中に色絵で岩のような連続文様を描いている。43は染付の小型の皿で、内面に山水文と飛鳥を描き、外面体部には簡単な線描きをし、高台際から高台には3重の圏線を描いている。高台内にも圏線を描きその中に渦「福」を書いている。44は粗製の染付皿で、体部内面には2重の格子文を描く。底部内面は蛇目軸剥ぎし、アルミナを塗布している。45は粗製の染付皿で、文様は体部内面に草花文を描き、底部内面は蛇目軸剥ぎしてアルミナを塗布している。46は輪花の染付皿で、内面の文様は大きな花の間に花詰めの模様で埋めている。外面体部の唐草文は2本の線を描き、その間を塗って唐草を連続させる古いタイプの唐草文である。高台際から高台にかけて3重の圏線を描く。蛇目凹型高台内には2重方形線の中に渦「福」のような字が書かれている。47は輪花の染付皿で、体部内面には区画した中に梅と宝物を描いた丸絵があり、空間は重圏文で埋めている。底部中央の丸の中に梅と鶯が描かれ、宝珠と葛草で埋めている。体部外面も宝珠と葛草が描かれ、高台際から高台に3重の圏線、高台内にも圏線を描きその中に2重方形枠内に渦「福」を書く。48もやや輪花になった皿で、体部内面は46の内面と同じ花と花詰めの文様で埋めている。底部中央に波頭を3つ合わせて丸文にしている。体部外面は1本線の唐草文を描く。高台際に2本の圏線を描き蛇目凹型高台の中には2重方形枠内に崩れた「福」の字のような銘がある。高台内にアルミナの付着が見られる。49もやや輪花になった皿で、体部内面には2重の区画線で区切った中に家などを描く。底部内面は中央に波頭を3つ合わせて丸文にしている。体部外面は1本の線で描いた唐草文を描き、高台際に2本の圏線を描く。蛇目凹型高台の中には2重方形枠内に渦「福」のような字を書いている。

50～57は鉢で、染付・色絵と青磁染付がある。

50は色絵筒型鉢で、外面は網目文の中の3方に飛ぶ鳥が描かれている。口縁部は露胎である。51は染付端反鉢で、向付などの小鉢として使用したものであろうか。体部外面には花文が4箇所を描かれている。高台際から高台に3本の圏線がある。高台内には何か書かれているが欠落して明らかではない。52は蓋付きの筒型の鉢で、口縁部と内面の一部は露胎である。丸文を重ねたのが3方にあるが何を表わしているかはわからない。その間の上には渦巻と雲の文様が配されている。丸文の下に3本、高台際に1本の圏線が描かれている。53は青磁染付の鉢で、口縁部はかすかに輪花状を呈している。内面は体部から底部にかけて松と松ぼっくりと思われる絵が相対した位置に描かれているが、松の葉が3つのものと2つのものがあり対称ではない。口縁部付近には四方樺文が連続して描かれる。高台は蛇目凹型高台の中に2重方形枠内に「筒江」銘がある。高台内には窯道具の痕跡とみられる跡がある。深皿に分類することも可能であろう。54は色絵の深鉢で、外面は染付の如意頭文の中に人物2人と花を色絵で描き、間に大きな花を1輪ずつ、高台際にも如意頭文の変形を連続して描いている。高台内には2重圏線内に「富貴長春」の銘がある。底部内面には牡丹を3輪、口縁部内面付近にも色絵と染付で連続模様を描くが、上絵付けが剥離して不明である。55は基筒底の端反鉢で、内面には渦巻文と龍が描いてあるが外面に文様はない。56は染付の端反鉢で、外面体部の文様は龍と宝珠の間に雲がたなびいている。底部内面には2重圏線の中に花唐草文が連続模様になっている。体部外面にも宝珠と雲が



图13 陶磁器・土器類実測図(3)

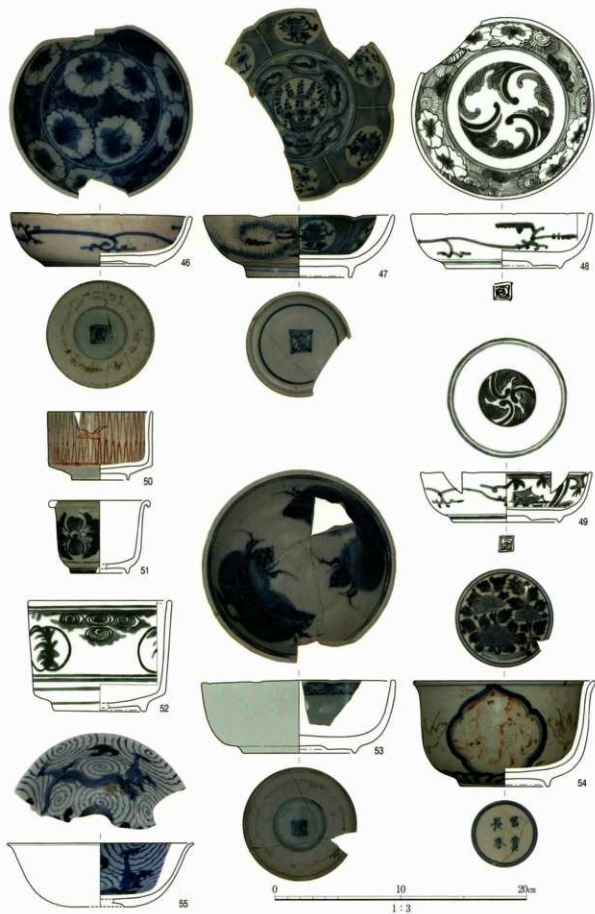


图14 陶磁器・土器類実測図(4)



图15 陶磁器·土器類実測図(5)

描かれる。高台際と高台に3本の圈線を描く蛇目凹型高台である。57は大型の染付鉢で、口縁部は輪花状である。口縁部の外面付近には2重圈線の中に牡丹唐草文を描き、体部は唐草文である。体部内面と口縁部は草花文を描く。底部内面の文様は宝珠である。高台は蛇目凹型高台で、アルミナ痕跡が円形に残る。高台内に2重方形枠内に「筒江」が書かれている。

58～60は染付の小杯である。

58は体部外面に草花文を描く。59はコンニャク印判で雨降り文を押す。60は染付で外面に笹を描く。

61～64は染付の猪口である。

61は体部外面に草花文を高台内の2重方形枠内に渦「福」を書いている。62・63はともに体部の2箇所異なった草花文を、その下方に圈線を描く染付の蕎麦猪口である。64は筒型の猪口で、体部外面2箇所に薊の絵が描かれている。

65～68は染付の仏飯器である。

65と68は外面2箇所の相対する位置に、65は草花文を、68は笹文を描く。66・67は雨降り文がコンニャク印判で連続して押されている。67の高台内には墨書がある。

69～71は染付と青磁の香炉である。

69は筒形で、山と月を染付している。相対する面に大きな絵を、その間に岩と水の小さな絵を描いている。高台は幅広く釉剥ぎし、三脚がつく。70は筒形の青磁で、高台を幅広くに蛇目釉剥ぎし、底部内面は露胎にして砂が付着している。71は高台と三脚の付く青磁の香炉である。

72～78は瓶である。青磁・染付・色絵がある。

72は青磁で仏花瓶であろうか、やや膨らんだ体部から頸部になるところの両側に飾りの取手が付く。73は染付の瓶型の瓶である。染付の文様は山と木であろうか正面と、裏にも崖のような絵が描かれている。74・75は香油瓶で、74は胴が膨らんでいて腰がやや高い。75は腰が低く横にとがっている。76・77は鶴首の染付瓶である。76は圈線だけの文様で、77の体部の文様は桜の枝文で、上部から頸には蛸唐草を飾る。首はまっすぐ口縁部に続いている。78も染付の瓶である。口縁部は広く、頸の部分に四方樺文を描く。体部は面取りをして、文様は山水楼閣文である。口縁端部と内面の一部は露胎であるが、下半は透明釉が掛る。

79～83は染付・青磁染付の蓋である。

79は段重の蓋で文様は3方に鳥、間には宝物を描き、全域は雲文で埋めている。把手は欠落しているが、取り付く部分には半菊花の連続文様を描いている。80は青磁染付の朝顔型碗の蓋で、文様は内面口縁付近に四方樺の連続文様を描き、底には2重圈線内に5弁花のコンニャク印判を押す。つまみ内に2重方形枠内に渦「福」を書いている。81は染付で、内面に草花を描いた丸文の外側に2重圈線を描き、外面は蛸唐草文を描いている。青磁染付の82は、いわゆる八字高台の碗とセットになる蓋である。高台内には2重方形枠内に「福」に似た字のようなものを書き、口縁部付近には四方樺文を巡らす。83は鉢の蓋で、身とセットの文様になると思われる。竹と雪持ち笹、松・花などが描かれている。

84は染付の水滴で、表面は型押しで花を描いている。

京焼系陶器85～108(註1)



图16 陶磁器・土器類実測図(6)



图17 陶磁器・土器類実測図(7)

85～93は碗である。

85～87・89は小さな低い高台に半球形の体部が乗る。85は銕絵染付の小型の碗である。86は体部外面の1方に鉄絵で草を描く。87は赤彩で格子状の線を描き、緑彩で花びらを盛り上げて描く。88は口縁部が厚く、高台幅が広い。体部外面には鉄絵で松を描く。89は体部外面の1方に赤彩の葉と銀化した緑彩の葉と花を飾る。底部内面に目跡を隠すため銀化した緑彩の飾りが3箇所にある。90は銕絵染付の若杉文碗で、根付の若松を2本描いている。形は高台際から段になってやや膨らみを持って直線的に立上がる。91は蓋付碗の身である。形は90をややふくよかにしたものである。銕絵染付で下がり藤を描く。下がり藤の文様2つを薦でつないだものを描き、反対の面には1つの下がり藤が描かれている。92は平碗で、小さな低い高台に浅い平らな碗が載る。内面の文様は緑彩の絵具で菊花を散らし、部分的に赤彩も使用している。93は大ぶりの筒形碗か鉢である。底部内面に3箇所の目跡がある。高台際以下は露胎である。高台内に墨書がある。

94～97は蓋である。

94は91の碗の蓋である。同じ文様・配置である。95は土瓶の蓋であろう。上面に鉄軸がかかり、以下は露胎である。96は同じく土瓶の蓋であろう。灰釉で、内面に墨書があり、「極上京□」と読める。97は合子の蓋で銕絵染付が描かれている。

98は合子の身である。97とセットになるものであろう。99は小杯としたが、口縁端部が露胎になっているので、蓋付きの調味料入れのようなものになるのであろうか。

100は灰釉の灯明受け皿である。

101は灰落として、灰釉に鉄絵で松が描いてある。上端が傷んでいるので、灰落としとして使用したことがわかる。内面は一部透明釉が掛っている。

102～104は鉄軸の鍋である。すべて口縁部両側の上に取手が付く鉄軸の鍋である。底部外面は露胎で3箇所小さな脚が付く。

105・106は銅鍋である。105は鉄釉で、106は錆絵で松を描いている。

107・108は土瓶である。ともに丸みを帯びた体部に溜めのある注口が付くもので、口縁端部は露胎である。107の体部の文様は鉄絵で、菊花を重ねたものを2つの面に描いている。108の文様は鉄絵で立木を描いているようであるが、明らかではない。

瀬戸美濃焼陶器109～117

109～111は碗である。

109は灰釉の丸碗で、高台端部のみ露胎にしている。110は腰銘碗である。111は灰釉の碗であるが、胎土が灰色なので、表面は緑がかった色調になっている。高台際以下は露胎である。

112は型打ち成型の菊花皿で、布目痕が顕著である。灰釉の地の一部に鉄釉と緑釉を流しかけている。貼付け高台は高台際以下が露胎である。

113は方形の陶器鉢である。灰釉で文様はなく、相対する面に環状の把手を飾りで付けている。外底面の途中から露胎である。

114は鬚水入れで、灰釉に幾何学文様の鉄絵を刷り絵している。

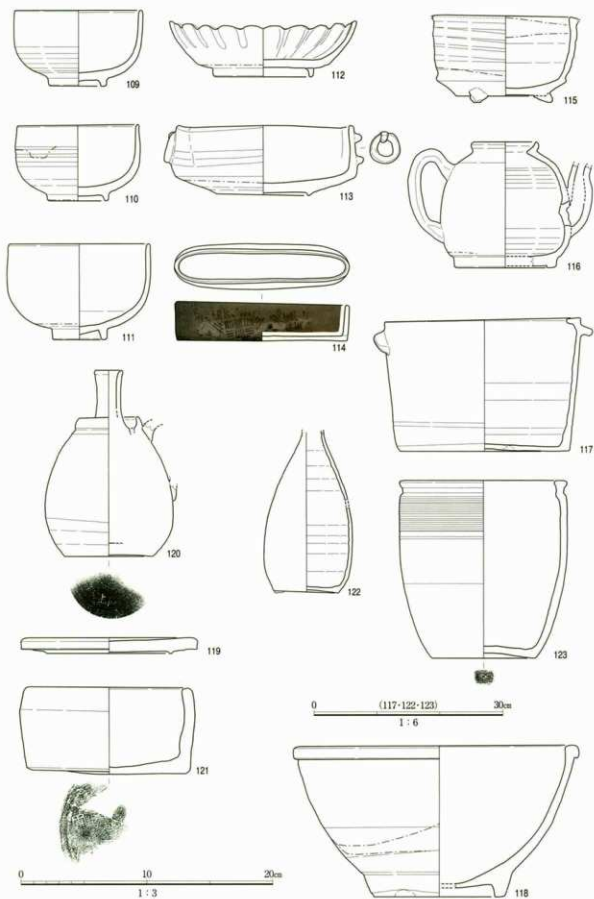


图18 陶磁器・土器類実測図(8)

115は鉄釉の香炉で、轆轤目を飾りにしているだけのシンプルなもので、外面体部と口縁部の内面付近にも釉薬が掛けられている。外底面に3つの小さな脚が付く。

116は灰釉の水注で、緑釉が部分的に掛けられている。

117は大型鉢で、胎土は半磁胎である。体部は平らな底部から直立しており、内側には轆轤目が残る。体部上辺両側に把手が付く。口縁部は逆L字状を呈している。

肥前陶器118

118は鉄釉の鉢で、口縁部の外面に凸帯が付く。内面から外面の上部に鉄釉が掛り、口縁端部は無釉である。外面は一部露胎で高台際に薄く鉄釉を塗っている。

備前焼119～123

119は焼締の落とし蓋で、把手はなく上面は平坦で、内側に直径13.5cmの凸帯がある。

120は焼締の灯明用の油徳利で、燕型の胴部に細い頸部が段になって付く。段のところには垂れた油が胴部を伝わないように溝になって空気抜きの孔があいている。把手は欠落しているが、全面に塗土でいいねいに仕上げ、火轆も見える。外底面には「上」の刻印がある。

121は匣鉢形の鉢で胎土がやや粗く、丹波焼の可能性もある。外底面に方形枠に「吉」の刻印がある。

122は燕型の徳利で、内面の轆轤目が明瞭である。外面は塗土の上に灰がかぶっている。外底面に焼成時の重ね焼きの痕跡がある。

123は小型の甕で、外面上半には飾りの条線があり、外面は塗り土をし、内面も鉄を塗っている。

丹波焼124～127

124は焼締の匣鉢形の鉢で 外面上部に8本の条線がある。体部外面と内面は口縁部の下2.5cmまで土泥を塗っている。外底面には松皮菱の中に「本」の字の刻印がある。

125は焼締の水指である。上部に条線を飾る。体部に土泥を塗っている。

126は内外面に鉄釉を掛けた施釉の甕で、短く立上がった頸部にやや内傾したT字状の口縁部が付く。肩部には条線が施文され、不遊環が付いている。また、肩の一部に黒色釉が流し掛けされている。

127は桶で、形は平らな底からやや膨れ気味に直線的に広がって口縁部になる。体部の底近くには断面が丸みを帯びた凸帯があり、口縁部までの中ほどにくびれがある。くびれから上に数本の条線が釉の下に付けられている。口縁端部は内側につまみ出して平らにし、上面に条線が付けられている。内面から外面の口縁部付近まで土泥を塗り、外面は灰釉を掛けている。外底面と口縁端部に重ね焼きの痕跡がある。口縁端部の痕跡は陶片と考えられる。

信楽焼128

128は施釉の甕で、底部からやや広がり気味に立上がり、頸部ですぼまり、やや長い頸部が付く。胎土は白く焼き締まっている。内外面に鉄釉を掛ける。

堺焼鉢129～134

129～134ともに堺焼鉢で、白神福年[白神典之1992]のI型式に属するものである。特に132は焼き台の痕跡が顕著である。131・133・134の口縁部に刻印がある。はっきりわかる刻印は、131は扇形の中に山型の下に「さ」、134は扇形の中に「上」がある。

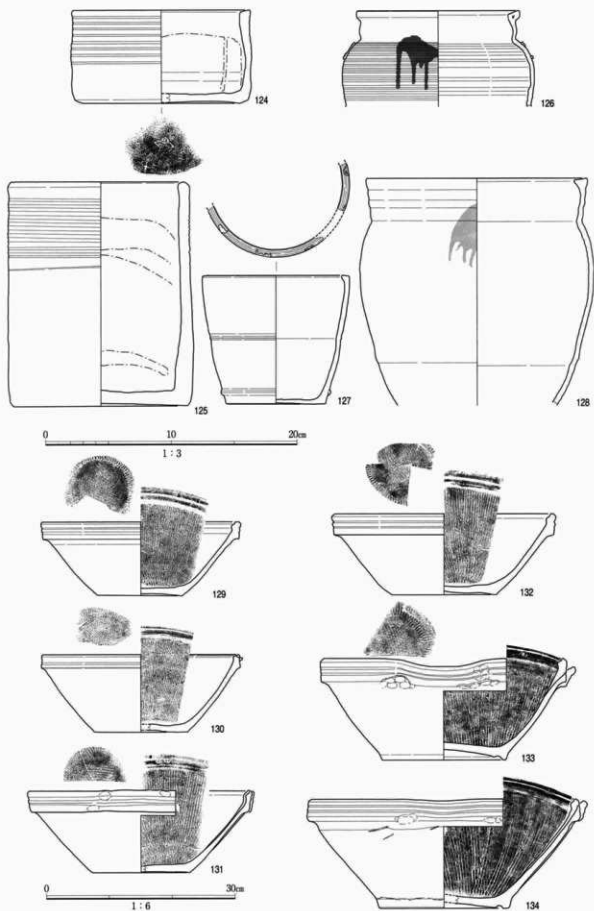


图19 陶磁器・土器類実測図(9)

軟質施釉陶器135～138・149・150

135～138は軟質施釉陶器の灯明受け皿である。ロクロ成形で、透明釉を掛けている。

139も同じ作りの軟質施釉陶器の皿である。

149・150は乗燭で、149は透明釉、150は鉄釉を全面に施釉しているが、剥離がひどく痕跡しか残っていない。

土師器140～148・151～168

140～145・148はロクロ成形の灯明皿である。140～145・148の胎土はやや赤みを帯びた橙色である。内外面とも回転ナデが顕著で、外底面は糸切り痕跡がある。148は口縁部に煤の付着がないので、皿として使用したものであろう。

鉢形の146はロクロ成形で作られている。胎土は白く細かいので他の土師器の製品とは異なっている。皿の可能性もあるが、土製玩具の「でんぼ」としたほうが良いものかも知れない(註2)。

147は灯明受皿で、大きさ形態ともに軟質施釉陶器の灯明受け皿と同じである。

151・152は手づくねの皿で、器壁の厚さが一定せず、体部外面にユビオサエが顕著である。

153はロクロ成形の皿で、外底面に「出」のような墨書がある。

154・155は焼塩壺で、方形の枠に「泉湊伊織」の刻印がある。

156・157は焼塩壺の蓋で内側は布目痕跡があり、他のところはナデ調整している。

158は土師器羽釜で、3合ほどしか炊けない小型品である。器壁は厚い。鈎の上面に「○」の刻印がある。内面から口縁部付近の外面まで黒く変色している。

159は十能で外型で作られ、内面はナデ調整し、中央に火を受けた痕跡がある。

160は焔炉で、形から慣用的に風炉と呼ばれるものである[能芝 勉2003]。平らな底部の3箇所足が付き、体部は丸く膨れ、口縁部でつままる。体部外面は磨いている。体部上半に空気抜きの円形の小さな孔を2箇所にあけている。内面には五徳の役目の突起が3箇所付いている。上半部から口縁部にかけて煤が付いている。

161は方形火入れで、簡単にナデだけで調整され、口縁部も特別な形にはしていない。炬燵などに入れて使われるものと思われる。一辺が約15cmの方形なので、一人用の炬燵ではなく、置炬燵のようなものに使われたものであろう。底から約5.5cmより上に煤が付いており、ここまで灰や炭を入れて使用したと思われる。

162～168は焙烙で、162～166は難波分類[難波洋三1992]のD類である。162は直径17cmの小ぶりの焙烙である。164・165は口縁部の上端に貫通しない孔を穿ったb2類である。166はa1類で、口縁部に粘土を貼りつけて厚くしている。孔は貫通している。反対面は欠落していて不明である。167・168はF類である。鈎から下の外面に煤が付着している。これらの胎土は橙色で、黄色みを帯びた橙色であるD類とは異なっている。ほかに数片の枚方産G類が混っている。

ii) 上層の陶磁器・土器

上層からも多くの陶磁器が出土していて、大半は下層のものと変わらない。次に上層で出土しているものの中からいくつかを取り上げる。

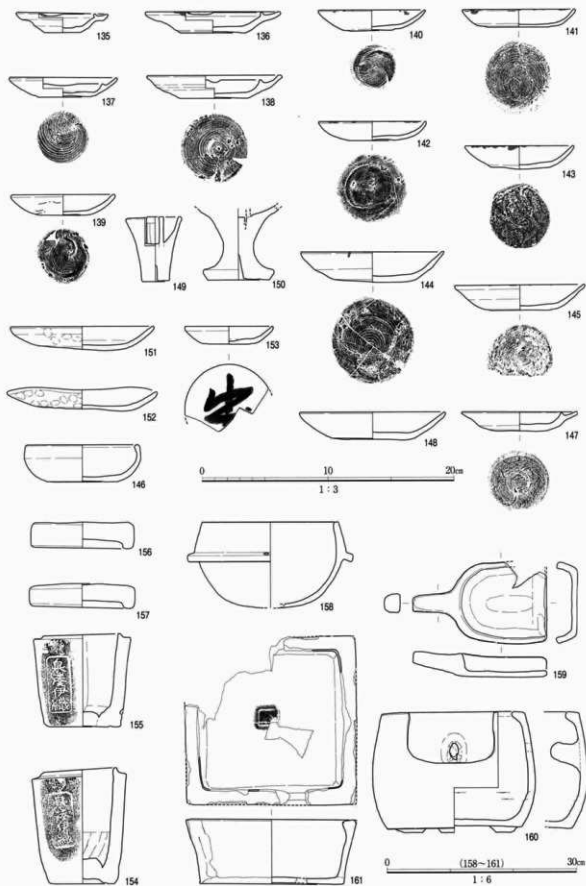


图20 陶磁器・土器類実測図(10)

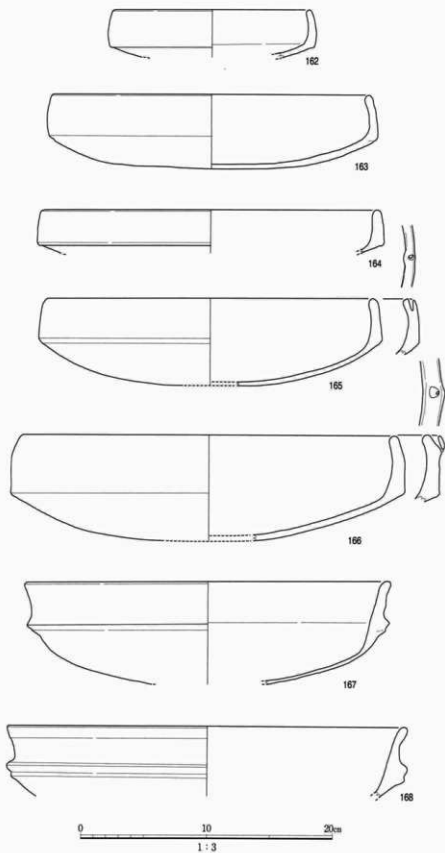


图21 陶磁器・土器類実測図(11)



図22 陶磁器・土器類実測図(12)

肥前磁器169～171で、169は下層で報告した4の家紋を描いた碗と同じ形のものであるが、家紋は丸の中に菱が描かれている。口縁部の内側を露胎にしているので、蓋付の碗の可能性もある。170は広東碗の高台である。171は小型の鉢の蓋で、圈線が数本単位で巡っている。

関西系陶器172・173のうち、172は端反の小型碗で、内面は白泥、外面は透明釉を掛け、イチッンで山を描いている。173は行平の蓋で、口縁部から外面は無釉で、異なった土で楕円形の中に建物などの文様を浮き出したものを貼付けている。中央のつまみは欠落して不明である。口縁部の内面際から内側は透明釉が掛っている。

瀬戸美濃焼蓋174は小型の落とし蓋である。上面に透明釉を掛け、内側は露胎である。

瀬戸美濃焼磁器175は端反の染付碗で、口縁部の外面付近に太い圈線と細い圈線を描き、体部の文様は不明である。高台と高台際に3本の圈線を描く。口縁部の内面付近には2重圈線の中に点を連続して描いている。底部内面周囲にも2重の圈線を描く。

176・177は土師器である。176は焼塩壺の身で、胎土は粗く小礫が混る。

177は白く細かい胎土で、外型の痕跡が残る。口縁部の中ほどから内側はナデ調整している。用途は不明である。

iii) 時期と特徴

大土塙SK03の下層と上層の陶磁器・土器類について述べてきたが、それぞれの特徴や時期についてまとめると以下ようになる。

まず下層の陶磁器・土器類については、肥前磁器は蓋付の碗が目立っている。粗製のものも多く、それらにはアルミナの塗布がある。青磁染付の碗や鉢なども一定数出土している。京焼系陶器は碗が多く、土瓶の注口は溜めのあるものである。瀬戸美濃焼は磁器が出土しておらず、丹波焼はいわゆる貧乏徳利の出土がない。土師器では皿はロクロ成形のものが多くあり、手づくねのものは少ない。焙烙はD類が中心で、F類が若干とG類も数片混る。これらの遺物の時期は、周辺でみると、本調査敷地内のSK810163や[大阪市文化財協会1984]、調査地の北にある旧大阪市中央体育館敷地で行った調査のSD723[大阪市文化財協会1992]によく似ている。それらの年代から下層の時期は、19世紀に入る

可能性を若干残すものの、おおむね18世紀の終わり頃に収まるのではないと思われる。

上層は肥前磁器の広東碗や、関西系陶器の行平の蓋、瀬戸美濃焼磁器碗などがあることから19世紀の初め頃に堆積した層であると思われる。

今回の報告では、磁器を中心に茶碗体部の文様の配置を記述してきた。肥前磁器と京焼系統ではその文様を描く位置が異なっている。この相違はそれぞれの陶磁器の使用法の違いに関係するのではないかと考え、次のように整理した。

肥前磁器の文様の描き方は全面に描く以外では次の4種類がある。

- (1) 体部外面の2箇所に同じ図柄の文様を描く場合に一方には数を多くし、他方は少なくする。(7・30・31)
- (2) 体部外面の2箇所に異なる図柄の文様を描く場合は、一方は広い範囲に展開させ、他方は枝や、岩などの絵を1点だけ描く。(5・23・26・29)
- (3) 体部外面の一方は茶碗の半分近くの広い範囲に1つの文様を描き、他方は何も描かない。(21・24・25・28)
- (4) 体部外面の全体に文様を描き、その中で特に強調して描くところを2箇所、強弱付けて描く。(27)

これらの文様の描き方は碗の正面を意識しているので、会席膳やお茶事の膳などに使われたのではないかと考えた。しかし、このような絵の描き方をしているのは粗製の碗が多く、薄手の上手の碗では見られない。磁器の上手の碗(3・8・14・15など)では、内外面をていねいな文様で埋め、口縁部付近にも連続文を描いている。

一方、京焼系の碗の中に、蓋付碗91・94のような文様は(1)の描き方で、正面を意識した文様構成のものがある。京焼系の上絵付を施す碗の役割は客を意識して器を並べる現代の会席膳的なものに使われて、磁器碗とは使い分けをしていたのではないかと推測できる。

2) 土製品類

今回の調査で出土した土製品の大半は、大土壌SK03からの出土である。この報告では大土壌出土のものほか、本調査で出土したすべての土製品を対象として分類および検討を行い、全体の様相を記すことにする。その種類が識別できたものは384点にのぼる。

1) 分類方法

土製品の分類は、種別、成形方法、胎土および焼成方法によって行うことにする。

種別：形状や用途により、土人形、飯事道具、箱庭道具、その他の大きく4種類に分類し、さらに器種により細分した。土人形は人物と動物、飯事道具は日常雑器類のミニチュア各種、箱庭道具は建造物などを模したもので、各器種により細分した。その他として鳩笛、面模、



分類	点数	割合 (%)
土人形(人物)	91	23.7
土人形(動物)	107	27.9
飯事	120	31.3
箱庭	37	9.6
その他	29	7.6
合計	384	100.0

図23 土製品品の組成

土鈴などの玩具類である。それぞれの数は、土人形の人物91点、動物107点、飯事道具120点、箱庭道具37点、その他29点を数える。

成形方法：おもな成形方法は、型合わせ、型押し、手捻りの3種類である(註3)。型合わせは、片面ずつ型に粘土を押しつけ、型から外した粘土を前後、左右もしくは上下に組み合わせる方法である。この方法には中が詰まった中実のものと、中空のものの2種類がある。さらに底部に空けられた穴は大きさにより大、中、小と、穴を空けないもの、底部を作らないもの(以後、下方開放)に分類できる。穴の形状は、大は直径10mm以上で円錐形を呈し、中は5～10mm未満、小は串状のもので空けられた5mm以下のものである。型押しは、型に粘土を押しつけ粘土を抜く方法と、上下から型で押す方法である。手捻りは、型を使わずそれぞれの部分を作り、それらを組み合わせる方法である。その他の成形技法は飯事道具に多いロクロを使用する方法と、箱庭道具の家や飯事道具の竈に見られる粘土板を組合わせる板作りである。

胎土および焼成方法：土師質で無釉のもの(以下、土師質)、土師質で施釉のもの(以下、軟質施釉)、瓦質、陶質、磁質の5種類に区分できる。

以上の分類に基づき、概要を述べていくことに

種別	点数	割合(%)	穴の大きさ(中実)	点数	割合(%)
仏像	21	23.1	大	39	68.4
天神	7	7.7	中	2	3.5
西行	1	1.1	小	6	10.5
布袋	2	2.2	なし	3	5.3
恵比須	2	2.2	不明	7	12.3
福祿寿	1	1.1	合 計	57	100.0
虚無僧	6	6.6			
人物	51	56.0			
合 計	91	100.0			

焼成方法	点数	割合(%)	穴の大きさ(中空)	点数	割合(%)
土師質	85	93.4	大	0	0.0
軟質施釉・黄	4	4.4	中	0	0.0
瓦質	1	1.1	小	1	5.3
陶質	1	1.1	なし	1	5.3
合 計	91	100.0	下方開放	6	31.6
			不明	11	57.9
			合 計	19	100.0

成形方法	点数	割合(%)	穴の大きさ(手捻り)	点数	割合(%)
型合わせ	76	83.5	大	0	0.0
手捻り	14	15.4	中	1	7.1
不明	1	1.1	小	1	7.1
合 計	91	100.0	なし	8	57.1
			不明	4	28.6
			合 計	14	100.0

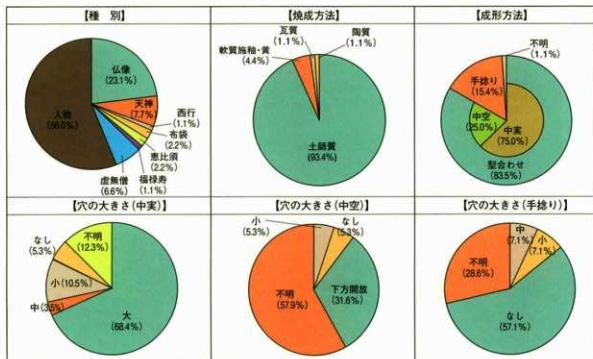


図24 人物の組成



图25 土製品類実測図(1)

する。

ii)土人形

195点あり、うち人物が91点で全体の24%、動物が107点で28%を占める。

人物：神仏などでは、仏像178・179、天神180・181、西行182、布袋183、恵比須184、福祿寿や虚無僧185・186がある。人物として分類したものには、釣り人187、猿回し188、三番叟189、唐人190、熊に乗った金太郎191、男性・女性座像、立像192～200などがある。大型のものは少なく、西行と人物立像196の2点である。

成形方法は、型合わせが76点、手捻りが14点を数える。型合わせのものは、中実のものが57点、中空のものが19点である。神仏などはすべて型合わせで、手捻りのものは見られない。底部の穴の大きさと分類すると、中実のものでは大きなものが一番多く、39点を数える。穴の大きさが中は2点、小は6点、穴を空けていないものが3点である。中空のものでは、下方開放のものが6点と最

種別	点数	割合(%)
牛	34	31.8
鳥	20	18.7
馬	9	8.4
狐	8	7.5
猿	5	4.7
狛犬	4	3.7
犬	12	11.2
猫	2	1.9
亀	3	2.8
魚	5	4.7
不明	5	4.7
合計	107	100.0

成形技法	点数	割合(%)
型合わせ	96	89.7
手捻り	4	3.7
不明	7	6.5
合計	107	100.0

穴の大きさ(中実)	点数	割合(%)
大	21	47.7
中	5	11.4
小	8	18.2
なし	5	11.4
不明	5	11.4
合計	44	100.0

焼成方法	点数	割合(%)
土師質	97	90.7
軟質施釉・黄	6	5.6
軟質施釉・赤	3	2.8
瓦質	0	0.0
磁質	0	0.0
陶質	1	0.9
合計	107	100.0

穴の大きさ(中空)	点数	割合(%)
大	0	0.0
中	0	0.0
小	2	3.8
なし	0	0.0
下方開放	18	34.6
不明	32	61.5
合計	52	100.0

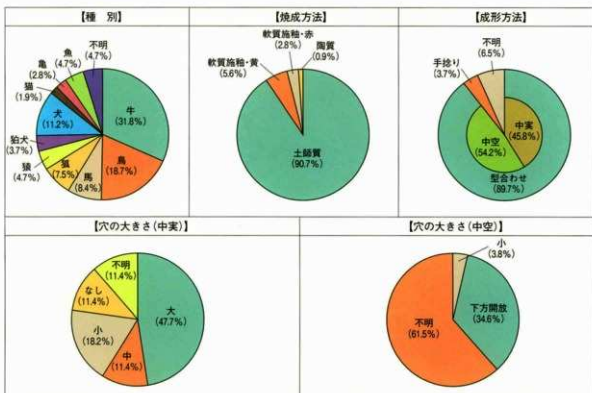


図26 動物の組成



图27 土製品類実測図(2)

も多い。釣り人や西行、人物立像に用いられている。手捻りのものは、精緻に作られたもの192と、雑に作られたもの198がある。

胎土および焼成方法は、土師質が85点と全体の94%を占め、続いて軟質施釉が4点で4%、瓦質と陶質がそれぞれ1点ずつである。土師質の天神は使用されている胎土が4種類あり、橙灰色の粗いもの、橙白色の細かいもの、灰白色の精緻なもの、橙白色と赤色のマール状の細かいもの180である。しかし成形方法に違いはなく、すべて型合わせで中実、穴が大きく空けられている。人物200・201には2色の粘土が使用されており、顔や手、足には白い土を用い、着物や帽子状の被り物には赤い土を用いて使い分けている。軟質施釉のものは、胎土が白く淡黄色に発色したものに限られ、天神181と釣り人である。瓦質のものは、力士と思われる。陶質のものは顔のみの残存のため、水滴などの可能性も考えられる。

動物：庚申信仰の猿、稲荷信仰の狐、疱瘡除けの牛など、民間信仰に関するものが大半を占める。牛34点、鳥20点、馬9点、狐8点、猿5点、狛犬4点、犬12点がある。その他に猫2点、亀3点、魚5点がある。

成形方法は、人物と同様に型合わせが90%を占め、猿223と犬220は手捻りである。型合わせの大半は前後の組み合わせであるが、亀224と浮き人形の水鳥213が上下の組み合わせである。中実のものは、人物と同様に穴の大きなものが多く21点(48%)を占める。次いで、小さな穴のものが8点(18%)、中が5点(11%)である。同じモチーフのものに中実と中空があるのは、牛・馬・犬・狐・魚・鳥である。牛・馬・狐の小型品は中実で、中空は器壁が厚く腹部がくり抜かれており、下方開放である。牛は小型品は型合わせで、中～大型品は胴部が型合わせで、足や尻尾は粘土を足して作られている。馬207は胴部を型合わせで作り、尻尾は別に作り差し込むものである。牛、馬の小型品202・208には、腹部に大きな穴が空けられている。

胎土および施釉方法は、土師質が97点で90%を占める。牛・馬には赤く彩色したものがある。軟質施釉は9点あり、猿・狛犬・亀・鳥である。胎土の違いにより発色が橙褐色と、淡黄色の2種類に分類できる。橙褐色のものは胎土も橙褐色で、白と緑が施されており、亀・鳥212・224がある。淡黄色のものは胎土が白く緻密で、緑彩が施されている。狛犬216・217と亀がある。

iii) 飯事道具

飯事道具は用途により、食器類・厨房道具・その他に分類する。120点が出土し、うち食器類は皿33点、碗・鉢12点、片口5点、急須2点である。厨房道具は壺4点、甕2点、搗鉢12点、釜2点、蓋6点、漏斗7点、竈10点、盃台4点、花瓶4点、桶1点がある。その他に棹秤の皿と鉢が各2点、鉦10点、でんば・杓でんばが各1点ある。

成形方法は、型合わせ7点(6%)、型押し75点(63%)、ロクロ23点(19%)、板作り10点(8%)の4種類である。同じモチーフの中には成形方法が異なるものと、すべて同じ方法で作られているものがある。

異なる成形方法があるものは、皿226～232、碗・鉢233～239、壺243～246、搗鉢、盃台252・253、花瓶254である。皿はロクロによるもの227の1点を除けば、すべて型押し成形である。碗・鉢



图28 土製品類実測図(3)

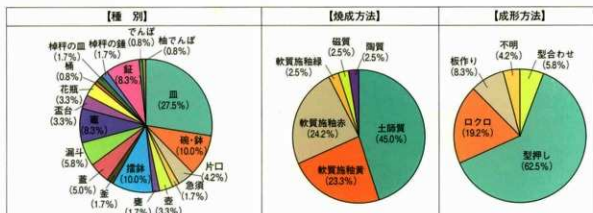


図29 飯事道具の組成

種別	点数	割合 (%)	焼成方法	点数	割合 (%)
血	33	27.5	土師質	54	45.0
鉢・鉢	12	10.0	軟施・黄	28	23.3
片口	5	4.2	軟施・赤	29	24.2
急須	2	1.7	軟施・緑	3	2.5
壺	4	3.3	磁質	3	2.5
蓋	2	1.7	陶質	3	2.5
漏斗	12	10.0	合計	120	100.0
盥	2	1.7			
盥	6	5.0			
蓋	7	5.8			
漏斗	10	8.3			
盥	4	3.3			
花飯	4	3.3			
桶	1	0.8			
棹杵の皿	2	1.7			
棹杵の鉢	2	1.7			
鉢	10	8.3			
でんぼ	1	0.8			
袖でんぼ	1	0.8			
合計	120	100.0			

成形技法	点数	割合 (%)
型合わせ	7	5.8
型押し	75	62.5
ロクロ	23	19.2
手捻り	0	0.0
板作り	10	8.3
不明	5	4.2
合計	120	100.0

*「軟施」は軟質施釉の略

種別	点数	割合 (%)	焼成方法	点数	割合 (%)
家	11	29.7	土師質	28	75.7
橋	7	18.9	軟施・黄	4	10.8
鳥居	4	10.8	軟施・赤	5	13.5
灯籠	3	8.1	軟施・緑	0	0.0
城門・城壁	3	8.1	瓦質	0	0.0
塔	1	2.7	磁質	0	0.0
祠?	1	2.7	陶質	0	0.0
舟	1	2.7	合計	37	100.0
神輿	1	2.7			
箱庭	2	5.4			
不明	3	8.1			
合計	37	100.0			

成形方法	点数	割合 (%)
型合わせ	17	50.0
型押し	11	32.4
ロクロ	0	0.0
手捻り	1	2.9
板作り	5	14.7
合計	34	100.0

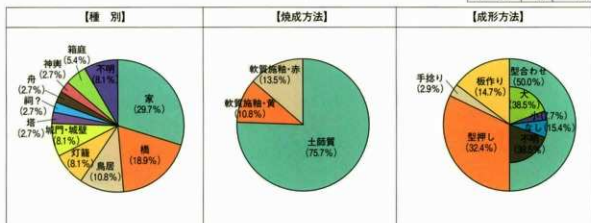


図30 箱庭道具の組成

では型押しが7点、ロクロ成形が4点である。皿や碗・鉢類で型押しのものは、外面に菊花状のヒダが入り、内面はナデで成形されている。壺、花瓶は型合わせとロクロ、盃台と描鉢は型押しとロクロによるものである。

モチーフがすべて同じ方法で作られているのは、片口240・241、急須242、釜247、甕、蓋248・249、漏斗250・251、鉦255、棹秤の皿256と鍾257である。

型合わせは急須242、棹秤の鍾257がある。急須は上下の型合わせである。型押しは片口・釜・蓋・棹秤の皿・漏斗・桶・鉦がある。片口はすべて型押しであるが、軟質施釉の片口241の注口部と把手部分は手捻りである。ロクロによるものは、甕・でんぼ269・桶でんぼがある。甕はすべて板作りである。

陶質の碗236は京焼系のもので、ロクロ成形である。磁質の碗238は、型押しで成形されている。これらは実用の碗をそのまま模したもので、模様も実用品と変わりなく描かれている。

胎土および焼成方法は、土師質が54点(44%)、軟質施釉が60点(50%)、磁質が3点(3%)、陶質が3点(3%)である。軟質施釉は淡黄色28点(23%)・橙褐色29点(24%)・緑色3点(3%)である。皿、碗・鉢、片口、描鉢、壺、花瓶は、土師質と軟質施釉の両方がある。土師質の皿はやや大型で、内面に細かい文様が施されている。

iv)箱庭道具

箱庭道具は37点が出土している。建造物のミニチュアに家11点、橋7点、鳥居4点、灯籠3点、城門・城壁3点、塔1点、祠?1点がある。その他として舟、神輿は各1点、箱庭が2点ある。

成形方法は、型合わせ17点(50%)、型押し11点(32%)、手捻り1点(3%)、板作り5点(15%)である。型合わせは、家、城門・城壁、神輿、鳥居、塔、灯籠、祠?である。家には型合わせ258のほか、床と壁が粘土板を組み合わせて作られている板作りの大型のもの259がある。型押しは、舟267、橋261・262、箱庭268である。舟は内側の凸型と外側左右2枚の凹型を合わせ、型押しをされていると思われる。

胎土および焼成方法は、土師質と軟質施釉の2種類であり、土師質は75%を占める。軟質施釉は、発色が2種類あり、橙褐色が14%、淡黄色が11%である。家が1点260と、橋が5点262、箱庭1点である。

v)その他

その他として、キセル2点、碁石1点、土鈴11点、鳩笛5点、面3点、芥子面子2点、面模4点、銭1点がある。碁石は、表面に casually 胡粉が残っており、白碁石として使用されたものと思われる。土鈴には2種類あり、紐にヒダのあるもの1点と、紐が突ったもの10点がある。面には猿1点272、人物の顔が2点ある。猿の面には、裏面に棧状のものが作

種別	点数	割合(%)
キセル	2	6.9
碁石	1	3.4
土鈴	11	37.9
鳩笛	5	17.2
面	3	10.3
芥子面子	2	6.9
面模	4	13.8
銭	1	3.4
合計	29	100.0

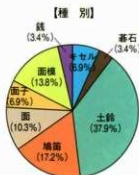


図31 その他の組成

られている。芥子面子のモチーフは、算盤273とウサギである。面模は、大黒が2点275、箱庭が1点274、植物のモチーフが1点である。銭280は表面に大黒が描かれ、裏面には模様はない。

成形方法は、キセル、碁石、土鈴、鳩笛、面模はすべて手捻りで、面、芥子面子、銭は型押しである。胎土および焼成方法は、キセル、鳩笛は軟質施釉の発色が淡黄色のもので、それ以外はすべて土師質である。鳩笛は5点のうち4点に緑釉がつけられているが、1点のみ緑と茶色の2色の釉をつける。

3) 瓦埴類

いずれもSK03下層出土で、軒丸瓦281～283、軒平瓦284～294、軒棧瓦295、隅蓋と思われる飾瓦296、丸瓦297・298、埴299、平瓦300、不明瓦質製品301・302がある。いずれも西部出土である。

軒丸瓦や軒棧瓦の瓦当の巴文の巻きは、巴頭から尾の方向への向きで示す。

軒丸瓦281～283はいずれも左巻き三巴文で、胎土はダマ(粘土偽礫)が目立つが白っぽく、灰色クサリ礫を含むことから大坂産[白石純2002・2006]と思われる。281は巴頭からU字状に屈曲して延びる巴胴は細く、尾は短い。珠文は大粒で復元すると13個を数える。瓦当全面に細かい離砂、丸瓦部凹面にコビキBが見られる。282は巴尾は長く、次の巴の胴部近くに達し、復元珠文数は18個。瓦当全面に細かい離砂が付着する。283は巴尾が長く、次の巴の尾部分にまで達するが、接しない。珠文は小粒で13個を数え、周縁部幅は2.5cmを測るから、文様区径は8.5cmと狭い。瓦当全面に細かい離砂が見られる。

軒平瓦284～294はいずれも均整唐草文で、胎土はダマが顕著だが白っぽく、灰色クサリ礫を含むことから、大坂産と考えられる。288～294の中心飾は橘文で、288・291以外は橘の実と片側Y字状一葉と萼で構成され、293・294はやや橘の実が大きい。288・290・292・294は橘文の左右に唐草一転とY字状子葉を配する。284は大振りの上向きの唐草一転のみを残し、側区に竹管による刻印を施す。平瓦部を失うが、平瓦凸面端部に端縁に平行に、原体6本の櫛によってカキヤブリを入れ、瓦当を芋継ぎした。285の中心飾は三葉の上に連珠を配するいわゆる東海式[金子智1996]で、左右に唐草を二転させる。瓦当全面にキラコを施し、上外縁を面取りする。瓦当裏面の平瓦との接合部に強いヨコナデを施す。286は中心飾が一点珠五葉だが、点珠は環を呈し、中心葉がダイヤ形、他の葉はY字状である。唐草一転の左に子葉と直線状の葉がみえる。瓦当全面に細かい離砂を施したようだが、外縁部はナデられている。芋継ぎで瓦当裏面の平瓦との接合部に強いヨコナデを施す。287の中心飾は、左右の葉がY字状を呈する三葉で、下に萼の凸線を有する。唐草が一転する。瓦当全面にキラコを施し、瓦当裏面の平瓦との接合部に強いヨコナデが見える。288の橘文はC字状一葉、Y字状一葉、L字状一葉と萼で、瓦当全面にキラコを施す。289・290は瓦当全面にキラコが付着する。291の子葉はL字状で唐草から派生する。瓦当全面にキラコが付着する。292～294も瓦当全面にキラコが付着し、294は芋継ぎで、瓦当裏面の平瓦との接合部に強いヨコナデを施し、カキヤブリが平瓦部の瓦当際に沈線状に現れる。

軒棧瓦295は左巻き三巴文の軒丸部で、尾が半周し、珠文をもたない。瓦当全面にキラコが付着する。胎土は灰色クサリ礫を含み、大坂産と考えられる。

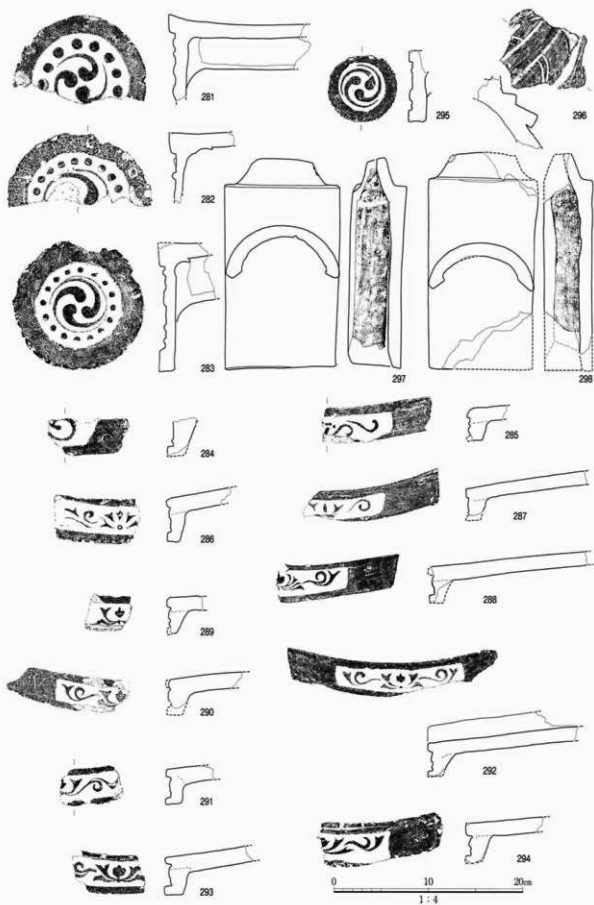


图32 出土瓦实测图(1)

節瓦296は桐文の左の葉で、欠刻(葉の縁の切れ込み)を有さずに、葉脈を沈線で表現する。裏の剥離面は球面を呈することから、隅蓋瓦の形象と推定される。胎土はダマが目立ち、灰色クサリ礫を含むことから大坂産と思われる。

丸瓦297・298とも同規格である。丸瓦部凸面にタテナデ、凹面にコビキBと布目痕が看取される。297の凹面に叩き板の小口によるタタキ痕がある。298は火中したのか全体に橙色を呈し、クサリ礫も赤い。

埴299は方形埴で、表面と端面はいいいなナデを施すが、裏面は不調整である。釘穴は表面から裏面に向けて穿孔し、穿孔に伴う粘土カスは焼成後に除去したため、裏面の釘穴周囲の剥離痕には極しが見られない。胎土は灰色クサリ礫を含み、大坂産と思われる。

平瓦300は全長27.0cm、広端部復元幅24.5cm、狭端部幅22.5cmで、胎土はダマが見られ、灰色クサリ礫を含むことから、大坂産と思われる。

不明瓦質製品301は、断面の表面0.2cmは白っぽく、それより内側は灰色のいわゆるアンコ状を呈し、上記した瓦埴類とは焼成を異にする。しかし平瓦様粘土板の中央を隅丸方形に削り抜き、筒部を接合した形態から、瓦埴類に含めた。平瓦部凸面の風化が顕著なことから、凸面を上にして設置したと考えられる。復元すると一辺24.0cm、高さ7.0cmとなる。側面・端面は鉛直方向にヘラ切りし、筒部の

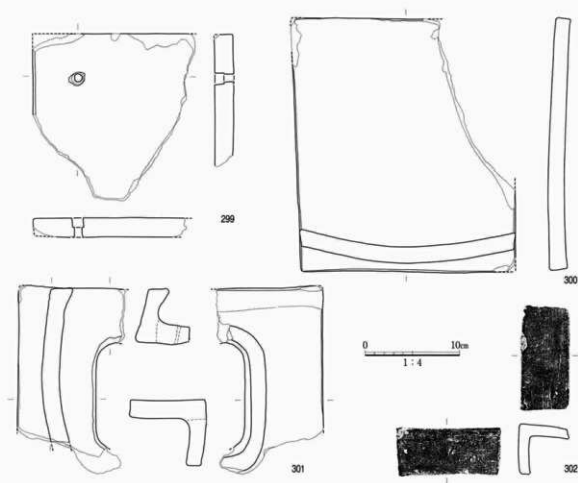


図33 出土瓦実測図(2)

下から1.0cmのところに、水平方向に直径0.3cmの孔を穿っている。中央区島町で行われた大坂城跡の調査(OS08-1次)でも、もっと大振りのものが出土している[大阪市文化財協会2008b]。

不明瓦質製品302は、焼成は301に近く白っぽいが、断面は真ん中の厚さ0.3cmがやや灰色のアンコ状を呈する。胎土に灰色クサリ礫を含むことから、大坂産であろう。幅5.0cm、厚さ1.1cmの粘土板の一方の側縁に、幅4.0cm、厚さ1.1cmの粘土板を接合して、断面L字形に仕上げている。かつて[大阪市文化財協会1992]で報告した3941番の豊臣後期例は堀り大面(大面熨斗瓦)としたが、大棟を構成するには薄く脆弱な感があり、出土も頻繁であることから、別の用途の可能性もある。

註)

(1)本報告で「京焼系」とした陶器と同種の製品について、これまで当協会では、関西で焼かれた陶器を総称した「関西系陶器」という用語を使用してきた。しかしながら、今回報告したものは、信楽で焼かれたものを含む可能性があるものの京焼が中心であり、かつ行平や後出する形態の土瓶あるいは灯明具や餌入れといった器種が一定数出土し、生産地が増えて特定できなくなる時期以前に当たると考えられる。そのため、「京焼系」として報告した。

(2)文化財研究部 川村紀子の教示による。

(3)成形技法についての理解については、[安芸雛子2006]を参考とした。

表2-1 土製品類観察表(1)

番号	地区	種別	器種	成形方法	形状	胎土	焼成	胎土の色調	彩色・ 胎土・ 釉薬	穿孔 方法	法量(cm)			備考
											幅	厚	高	
178	下層 (西部)	人物	仏像	型合わせ	中実	やや粗(赤色 粒・雜含)	土師質	橙灰色		大	3.6	2.8	11.4	完形
179	下層 (西部)	人物	仏像	型合わせ	中実	細(赤色粒含)	土師質	橙白色	胡粉? キラ?	大	4.1	2.4	8.1	ほぼ完形
180	下層 (西部)	人物	天神	型合わせ	中実	細 (マール状)	土師質	橙白色		大	5.4	2.2	(4.3)	頭欠
181	下層 (西部)	人物	天神	型合わせ	中実	細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑	なし	4	2.1	(4.4)	
182	下層 (西部)	人物	西行	型合わせ	中空	やや粗	土師質	橙色(外面黒 灰色)	下方 開放	(9.0)	(8.0)	(15.7)		
183	下層 (西部)	人物	布袋	型合わせ	中実	細	土師質	黄灰色	赤?茶?	なし	2.7	(1.6)	4.4	
184	下層 (西部)	人物	恵比須	型合わせ	中実	細	土師質	明橙白色		小	2.5	1.5	3.4	完形
185	一括	人物	虚無僧	型合わせ	中実	細	土師質	橙灰色		大	3.3	2.2	(6.6)	
186	下層 (西部)	人物	虚無僧	型合わせ	中実	細	土師質	橙白色		小	2.4	2.1	5.7	完形
187	下層 (西部)	人物	釣り人	型合わせ	中実	やや粗	土師質	橙白色		大	5.2	4.4	2.6	手の上に穴 (釣竿)
188	下層	人物	猿回し	型合わせ	中実	やや粗(赤・ 赤色粒含)	土師質	橙灰色		大	4.0	2.9	(5.8)	
189	上層	人物	三番受	型合わせ	中実	細	土師質	橙灰色		大	(4.7)	2.6	(5.5)	
190	一括	人物	唐人	型合わせ	中実	細	土師質	橙灰色		大	3.6	2.3	(6.1)	キラ多い
191	一括	人物	金太郎	型合わせ +手捻り (足)	中空	細	土師質	橙灰色		なし	9.8	6.3	12.0	
192	上層	人物	猿を 肩車	手捻り		細	土師質	灰白色		中	(4.4)	(3.5)	(8.2)	
193	下層	人物	おぼこ	型合わせ	中実	精緻	土師質	橙灰色		小	2.4	1.8	4.3	
194	下層 (西部)	人物	子守り	型合わせ	中実	細	土師質	明橙白色		大	3.0	4.4	(8.2)	
195	下層 (西部)	人物	男性立像	型合わせ	中実	粗	土師質	橙灰色		小?	4.7	2.0	6.8	台座少し欠、 頭の上欠
196	一括	人物	立像	型合わせ	中空	やや粗	土師質	暗橙灰色		下方 開放	7.1	5.8	(12.4)	
197	下層 (西部)	人物	女性坐像	型合わせ	中実	細(赤色粒含)	土師質	橙灰色		大	(5.1)	2.9	6.6	右袖少し欠、 ほぼ完形
198	下層 (西部)	人物	武人?	手捻り	中実	粗(雜含)	土師質	橙灰色		なし	(4.8)	(2.8)	(6.6)	
199	下層	人物	人物立像	手捻り か?	中実	細	土師質	橙灰色		なし	6.4	(3.9)	(5.2)	
200	下層	人物	坐像	手捻り+ 型(笠)	中実	やや粗	土師質	灰白色+ 橙白色	赤(笠)	なし	(7.3)	(6.4)	(5.8)	足、手(白土) 他(赤土)
201	下層 (西部)	人物	顔	手捻り+ 型		細	土師質	灰白色+ 橙白色		なし	(3.8)	(2.6)	(3.9)	2色の粘土 使い分け
202	下層	動物	牛	型合わせ	中実	やや粗(赤・ 赤色粒含)	土師質	橙灰色		大	8.6	4.2	2.9	
203	上層	動物	牛	型合わせ	中空	やや粗	土師質	暗橙灰色		下方 開放	(7.4)	3.2	(5.0)	
204	下層 (西部)	動物	牛	型合わせ +手捻り (足)	中空	やや粗(雜含)	土師質	橙灰色		下方 開放	(21.5)	(12.8)	(13.4)	
205	下層 (西部)	動物	馬	型合わせ	中実	細	土師質	灰白色		中	6.2	2.3	6.7	台付
206	一括	動物	馬	型合わせ	中実	細	土師質	灰白色		なし	8.9	3.9	(6.2)	キラ多い
207	下層 (西部)	動物	馬	型合わせ	中実	精緻	土師質	灰白色		下方 開放	(7.0)	3.1	(4.4)	尻尾差込式
208	下層 (西部)	動物	馬	型合わせ	中実	細	土師質	橙灰色	赤	大	7.75	2.8	(5.4)	足欠
209	下層 (西部)	動物	鶴	型合わせ	中実	精緻	土師質	橙灰色		小	3.0	1.9	3.5	
210	下層 (西部)	動物	鳥	型合わせ	中実	細(赤色粒含)	土師質	橙灰色		大	5.8	2.6	(6.2)	
211	下層 (西部)	動物	鳥	型合わせ	中実	やや粗(赤色 粒含)	土師質	灰白色		なし	(5.3)	2.65	4.25	
212	下層 (西部)	動物	鳥	型合わせ	中空	やや粗	軟質 施釉	橙褐色	(赤)+ 白+緑	小	5.3	4.2	4.4	
213	下層 (西部)	動物	水鳥	型合わせ (上下)	中空	やや粗	軟質 施釉	橙褐色	(赤)+ 白+緑	小	6.2	(3.6)	3.8	上面に穴 あり
214	下層 (西部)	動物	狐	型合わせ	中実	細(赤色粒含)	土師質	橙白色		小	2.5	2.3	(4.7)	
215	下層 (西部)	動物	狐	型合わせ	中実	やや粗	土師質	橙褐色	赤色	大	3.9	2.4	(5.4)	
216	下層	動物	狼犬	型合わせ	中実	細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑	なし	3.8	1.9	4.0	「時」

表 2-2 土製品類観察表(2)

番号	地 区	分 類	器 種	製作技法	形状	胎 土	焼 成	色 調	彩 色・ 釉 薬・ 文 様	穿孔 方法	法 量 (cm)			備 考
											幅	厚	高	
217	下層 (西部)	動物	舶犬	型合わせ	中実	細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑	なし	3.7	2.0	4.0	[阿]
218	下層 (西部)	動物	舶犬	型合わせ	中実	やや粗 (赤色粒含)	土師質	褐色		小	4.0	1.6	6.3	[阿]
219	下層 (西部)	動物	犬	型合わせ	中実	やや粗	土師質	暗褐色		大	(3.5)	2.3	(5.5)	
220	下層 (西部)	動物	犬	手捻り	中実	やや粗	陶質	黄灰色	茶褐色	なし	2.1	1.4	2.1	
221	下層 (西部)	動物	犬	型合わせ	中空	やや粗	土師質	褐色		不明	(7.1)	(4.3)	(4.5)	
222	下層 (西部)	動物	猫	型合わせ	中実	細	土師質	明澄白色		大	4.7	2.4	(4.3)	
223	下層	動物	狼	手捻り+ 型押し (腹)		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑	なし	(2.7)	2.4	4.2	
224	下層 (西部)	動物	亀	型合わせ (上下)	中空	やや粗	軟質 施釉	褐色	(赤)+ 白?+緑	?	(4.1)	(4.0)	(2.1)	
225	西部 褐色 シルト	動物	銅車	型合わせ	中実	細	土師質	暗褐色		大	(5.1)	2.4	(4.6)	
226	西部 褐色 シルト	飯事 道具	皿	型押し		細	磁質	白色			(3.4)	(2.9)	1.2	
227	下層	飯事 道具	皿	口クロ		やや粗	軟質 施釉	褐色	(赤)+ 白+緑		径8.7		2.1	
228	下層 (西部)	飯事 道具	皿	型押し		やや粗	軟質 施釉	褐色	(赤)+白		(5.3)	(4.1)	1.5	
229	下層 (西部)	飯事 道具	皿	型押し		細	土師質	褐色			(5.4)	(9.5)	1.8	
230	下層 (西部)	飯事 道具	皿	型押し		細	土師質	褐色			7.1	7.2	2.1	
231	下層 (西部)	飯事 道具	皿	型押し		細	土師質	褐色			(5.7)	(3.3)	1.9	
232	下層 (西部)	飯事 道具	皿	型押し		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑		径 (2.6)	2.6	1.7	
233	上層	飯事 道具	碗	型押し		細	軟質 施釉	暗褐色	緑		径2.6		1.2	
234	下層 (西部)	飯事 道具	碗・鉢	口クロ		精緻	土師質	灰白色			径4.2		2.6	完形
235	下層 (西部)	飯事 道具	碗・鉢	型押し		細	土師質	褐色			(4.4)	4.3	2.4	
236	下層 (西部)	飯事 道具	碗	口クロ		細	陶質	淡黄褐色			(2.9)		1.7	京焼系
237	下層 (西部)	飯事 道具	碗	型押し		やや粗	軟質 施釉	褐色	(赤)+ 白+緑		径 (3.1)		(1.6)	
238	下層 (西部)	飯事 道具	碗	型押し		細	磁質	白色			径2.6		1.5	
239	一括	飯事 道具	鉢	型押し		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑		(3.8)		2.7	
240	下層 (西部)	飯事 道具	片口	型押し		細	土師質	褐色			6.4	5.2	2.4	
241	下層 (西部)	飯事 道具	片口	型押し+ 手捻り		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑		(4.2)	3.8	(3.2)	
242	下層 (西部)	飯事 道具	急須	型合わせ (上下)	中空	やや粗	軟質 施釉	褐色	(緑)+黄		径 (6.3)		(4.3)	
243	上層	飯事 道具	壺	型合わせ?	中実	細	土師質	灰白色	白い釉		径1.9		4.3	
244	下層 (西部)	飯事 道具	壺	口クロ		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)+緑		径3.3		4.5	
245	下層 (西部)	飯事 道具	壺	型合わせ	中実	やや粗 (赤色粒含)	土師質	褐色			径3.6		6.0	
246	下層 (西部)	飯事 道具	壺	手捻り?		細	陶質	灰色	暗褐色		3.0		(4.4)	
247	上層	飯事 道具	釜	型押し		やや粗	土師質	明澄白色			径4.5		2.45	
248	一括	飯事 道具	釜	型押し		やや粗	土師質	淡褐色			径3.5		1.0	
249	下層 (西部)	飯事 道具	釜	型押し		細	土師質	褐色			径4.0		1.3	
250	下層 (西部)	飯事 道具	漏斗	型押し		細	軟質 施釉	灰白色	(黄)		径5.1		(3.6)	
251	下層 (西部)	飯事 道具	漏斗	型押し		やや粗	軟質 施釉	褐色	(赤)+白 +緑		5.1	(5.0)	(1.9)	

表2-3 土製品類観察表(3)

番号	地区	分類	器種	製作技法	形状	胎土	焼成	色調	彩色・釉薬*	穿孔方法	法量(cm)			備考
											幅	厚	高	
252	下層 (西部)	飯事 道具	蓋台	ロクロ	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			径4.4		2.9	
253	下層 (西部)	飯事 道具	蓋台	手捻り	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			径4.0		2.1	
254	下層 (西部)	飯事 道具	花瓶	ロクロ	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			径3.6		4.1	
255	下層 (西部)	飯事 道具	鉢	型押し	細	土師質	橙灰色				67	6.5	2.4	裏面に「そう み」とあり
256	下層 (西部)	飯事 道具	棒秤の皿	型押し	細	土師質	橙灰色				径 (4.7)		0.9	
257	下層	飯事 道具	棒秤の鉢	型合わせ	やや粗	土師質	橙灰色				1.6	1.6	(3.2)	
258	下層 (西部)	箱底 道具	家	型合わせ	中実 (赤色粒含)	土師質	橙灰色				5.0	5.9		
259	一括	箱底 道具	家	板作り	細	土師質	橙白色				(15.9)	(10.3)	(8.5)	
260	下層 (西部)	箱底 道具	家	型押し	中実 やや粗	軟質 施釉	橙褐色	(赤) + 緑 + 白			2.6	2.05	2.6	
261	下層	箱底 道具	横	型押し	細	土師質	橙灰色				(7.2)	3.6	4.5	
262	下層 (西部)	箱底 道具	横	型押し	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			(5.5)	3.4	2.2	
263	下層 (西部)	箱底 道具	鳥居	型合わせ	中実 細	土師質	暗灰色			不明	6.6	1.45	(3.6)	
264	下層 (西部)	箱底 道具	灯籠	型合わせ	中実 粗	土師質	橙灰色			大	(7.6)	2.8	2.8	
265	上層	箱底 道具	城門・ 城壁	型合わせ	中実 細	土師質	橙白色			小	(2.6)	1.3	2.9	
266	下層 (西部)	箱底 道具	塔	型合わせ	中実 やや粗(雜含)	土師質	橙白色			大	(7.3)	3.5	3.4	
267	下層 (西部)	箱底 道具	舟	型押し	やや粗 (赤色粒含)	土師質	橙白色				(4.9)	(11.3)	(4.3)	
268	下層 (西部)	箱底 道具	箱底	型押し	やや粗 (赤色粒含)	土師質	橙灰色				(7.3)	2.3	(6.2)	
269	下層	その他	でんぼ	ロクロ	細	土師質	灰白色				径 (4.9)		2.0	
270	上層	その他	キセル	手捻り	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			(8.1)	1.0		
271	下層 (西部)	その他	埴笛	手捻り	細	軟質 施釉	灰白色	(黄) + 緑			6.0	2.3	2.1	定形
272	下層 (西部)	その他	面(鏡)	型押し	細(赤色粒含)	土師質	橙灰色				5.3	(5.4)	2.4	裏面に横あり
273	上層	その他	芥子面子 (算盤)	型押し	細	土師質	橙灰色				1.7	1.2	0.5	
274	下層	その他	面模 (箱底)	手捻り	細	土師質	橙白色				(4.3)	1.65	(4.55)	
275	下層 (西部)	その他	面模 (大黒)	手捻り	細	土師質	暗茶色				3.4	1.5	5.0	
276	下層 (西部)	その他	土鈴	手捻り	細	土師質	黄灰色				径2.9		3.1	
277	下層 (西部)	その他	土鈴	手捻り	細	土師質	灰白色				径3.9		(3.3)	
278	一括	その他	土鈴	手捻り	細	土師質	灰白色				径5.5		5.0	
279	下層	その他	土鈴	手捻り	細	土師質	灰白色				径 (4.8)		(3.6)	
280	上層	その他	銭 (大黒)	型押し	精緻	土師質	灰白色				(3.9)	0.7		

* 彩色・釉薬：(黄)は淡黄色、(赤)は赤褐色に発色のもの

第Ⅲ章 遺物の検出

第1節 SK03下層出土遺物の数量的傾向

1)はじめに

調査地一帯は徳川期を通じて御蔵奉行や御金奉行・同心などの役所や役宅などの武家地であるが、町屋も含んでいる可能性がある場所である[大阪市文化財協会1984]。土壌から出土した陶磁器から当時の生活の一端が窺えるのではないかと考え、破片数を計測し統計処理を行った(註1)。

2)陶磁器・土器の分類

産地や陶磁器・土器の別で分類すると、土師器・瓦質土器・軟質施釉陶器・肥前磁器・京焼系陶器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・備前焼・丹波焼・信楽焼・堺播鉢・青花などがある。そのうちおもなのを表3に挙げた。その中で土師器は大坂近辺の製品が大半であると推定されるが、産地は特定できていない。

今回報告するSK03下層の陶磁器・土器の中で肥前磁器の出土は30%を占めている。それに続くのが京焼系陶器で14%である。土師器の比率が40%余りで一番多くを占めるが、焼きが甘いので割れやすく、細かく割れることが多いために比率が高いと考えられる。広島藩蔵屋敷跡出土のSK2003(18世紀中葉)と比較すると[大阪市文化財協会2004]、肥前磁器の占める割合はどちらも30%前後とよく似ている[宮本康治2003]。瀬戸美濃焼陶器ではSK03下層が2.9%に対し、SK2003では2.7%である。京焼系陶器は14%に対して19.6%、肥前陶器はSK03下層が3.4%でSK2003は6.7%と倍ほどである。

表3 周辺遺跡出土の陶磁器・土器の産地別比率

時期 区分	遺跡・遺構	暦年代	肥前 磁器	肥前 陶器	京焼系 陶器	関西系 磁器	瀬戸美濃 陶器	瀬戸美濃 磁器	土師器	報文
8	中体SK705	18世紀前葉	49.1	12.6	2.7	0.0	0.8	0.0	26.4	大文教1992
10	OS93-28、SK61	18世紀中葉	(67.5)	(16.2)	(6.4)	0.0	(5.4)	0.0	-	大文教2003
10	広島藩蔵屋敷跡 SK2018	18世紀中葉	38.2	15.9	5.8	0.0	0.0	0.0	28.8	大文教2004b
10	広島藩蔵屋敷跡 SK2003	18世紀中葉	約30	6.7	19.6	0.0	2.7	0.0	0.0	大文教2004b
11・ 12	中体SD723・724、 SK810163	18世紀後葉	(60.0)	(6.9)	(13.3)	0.0	(7.1)	0.0	-	大文教1992
11・ 12	国立病院SK03	18世紀後葉	30.1	3.4	14.0	0.0	2.9	0.0	40.6	本書
13	中体SK746	19世紀前葉	(57.6)	(2.3)	(19.2)	0.0	(8.1)	0.0	-	大文教1984
13	広島藩蔵屋敷跡 SK2024	19世紀前葉	34.6	2.3	22.7	0.0	5.7	0.7	15.0	大文教2004b
13	広島藩蔵屋敷跡 SK2064	19世紀前葉	32.8	1.6	16.1	0.6	0.0	1.7	0.0	大文教2004b

(註1) 本表は[積山洋1994・宮本康治2003]の内容と、今回の報告結果をもとに作成した。

(註2) 時期区分は[積山1994]に基づく。

(註3) 種別ごとの数量単位は%である。

(註4) 数量で()を付したものは、土師器を含まない陶磁器類のみを対象とする。

SK2003の方が京焼系陶器と肥前陶器の比率が高い。

SK03下層の肥前磁器の中では、碗が64% (1,641片)を占める。その中でも粗製と分類したものが約1/3(529片)である。蓋付きや朝顔型・ハの字高台のものは1% (22片)に満たない。皿は肥前磁器の中の約13% (333片)であるが、その中で粗製のくわんか手や蛇目軸剥ぎしているものは29% (96片)である。磁器の碗や皿は約1/3が粗製である。

碗の中で各産地の製品が占める比率は、京焼系陶器は39% (758片)、瀬戸美濃焼は17% (43片)、肥前陶器では12% (34片)である。SK03下層全体の碗の66%が磁器碗で、31%が京焼系の碗である。残りは肥前陶器碗と瀬戸美濃焼陶器碗が1～2%あまり使用されている。肥前磁器碗と陶器の碗との比率は1,641:835と約2:1で、磁器碗は陶器碗の倍である。

以上の数量比は、18世紀後半における当調査地において使用されていた実態を表している。それは身分、あるいは経済的格差のある社会で、一般の人びとが日常に使う粗製の肥前磁器碗が多く、一握りの客あるいは主人を中心とした人びとのための上手の蓋付碗が少量あり、上手の碗は肥前産の磁器と京焼系の陶器とを使い分けて使用していたと思われる。

3)用途ごとの分類

用途の分類はこれまでの報告書・研究に従い食膳・調理・貯蔵・調度具に分ける。今回出土したものに即した分類は以下のとおりである。

- (1)食膳具-碗・皿・鉢・調味料入れ・向付・蕎麦猪口・杯・段重・沓碗
- (2)調理具-鍋・釜・行平・土瓶・焙烙・搦鉢・燗德利・焼塩壺・十能・水注
- (3)貯蔵具-甕・壺・瓶・德利
- (4)調度具-水滴・紅皿・香油壺・餐水入れ・うがい碗・火消し壺・仏飯具・仏花生・花瓶・灯明皿・油德利・灯明受け皿・火入れ・乗燭・香炉・焔炉・合子・灰落とし・茶入れ・水指

以上の分類に従ってSK03下層出土の陶磁器・土器の用途ごとの比率を見ると、食膳具が62.6%、調理具が15.8%、貯蔵具が6.3%、調度具が11.1%、と食膳具が半分以上を占めている。

広島藩蔵屋敷跡検出のSK2018(18世紀中葉)の用途ごとの比率を比べてみる。食膳具は54.4%、調理具が8.7%、貯蔵具が4.9%、調度具その他が32%である。調度具に含まれている「その他」がどのようなものなのかは明らかではないが、調理具・貯蔵具の比率がSK03下層のほうが高いのは、分類基準の差異に起因する可能性もある(註5)。しかし食膳具が半分以上を占めることは同じである。

食膳具の比率が高い中でも、碗の比率が一番高い。その原因を考えると、当時は飯と汁と菜が食卓に上る場合、食器は飯碗・汁碗・皿(あるいは鉢)がセットで必要になる。汁碗は木器であると考えがちであるが、1950年代の大阪の一般家庭の中では、汁碗が陶器であった家庭は多い(註2)。木器は残りにくいから汁碗が木器を使うのか陶磁器を使うのかは出土品だけでは決められないが、18世紀の大坂でも陶磁器の汁碗を使っていた可能性は考えられる。碗としたものの用途が飯碗と汁碗なら用途の異なった2つの碗が必要になる。出土した碗は大きさ・形状も様々であり、飯碗・汁碗以外に小鉢・向付・茶のみ碗・杯などの用途に使われたので数量が多くなっているであろう。戦後間もないころ

の大阪で汁椀が陶器であったように、SK03が埋められた頃も木器の椀ではなく、陶器の椀が汁椀に使われたのかもしれない。そのためSK03に碗の出土比率が高いという結果を招いたのであろうか。

4) まとめ

以上、数量的に明らかになったことを羅列した。その結果、陶磁器の半分以上が食膳具であり、調理具を併せると80%以上が食事に関するものである。とくに碗の数が多く、磁器と陶器で使い分けがあった可能性が考えられた。18世紀後半に調査地でどのような器がどのくらい使われていたかを調査し、他の遺跡と比較することで、この地で生活していた人びとの特徴の一端が明らかになるのではないかと考えた。

調度具の中に字を書く人がいたことを証明する水滴や、茶道をたしなむ人がいたことのわかる茶入れ・水指が出土したことで、この地で生活した人びとの生活の一端が垣間見られた。

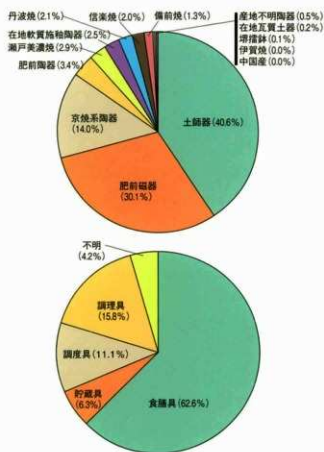


図34 陶磁器・土器の産地別・用途別集計

第2節 土製品類について

土人形をはじめとする土製品は、これまで大阪市内の発掘調査では大坂城跡、広島藩大坂蔵屋敷跡などから大量に出土している[大阪市文化財協会1984・2000b・2004]。今回の調査地がある大阪医療センターの敷地内では、これまで24件の調査がなされ、そのうちの2件において、今回と同様に土製品が大量に出土している。

ここでは、本調査区だけの検討ではなく、既往の調査との比較検討も行ってみたい。

1) 今回の調査成果

まず、前章で報告した今回の出土資料について、特徴的な点をまとめると以下のようになる。

- (1) 土人形(人物・動物)は、小型で中実のものが195点中98点で半数を占める。大型のものは少なく数点である。
- (2) 小型で中実のものは、底部に大きな穴があるものが60点(59%)と半数以上を占める。
- (3) 人物の中で、神仏などの民間信仰に関するモチーフは44%を占めるが、それ以外のモチーフが56%と多い。
- (4) 同じモチーフの中で、胎土のバラエティーがみられる。
- (5) 飯事道具や箱庭道具の出土量が多い。
- (6) 面子類の出土数が2点と非常に少ない。

以上のように、今回出土の資料は、人物に分類した中で神仏以外のモチーフが多いこと、19世紀に入ると爆発的に増加する面子類が極端に少ないこと、大型の土人形がほとんど出土していないことなどから考えると、18世紀後半から19世紀初め頃に当ると考えられる。

これまで土人形の底部の穴について、大きなものは大坂で製作されたといわれている[安芸穂子2001]。京都では、この特徴を持つ土人形はほとんど出土していない(註3)。大坂の18世紀初めから後半頃までの資料があまり確認されていないので、大きな穴の出現期はわからない。しかし、今回出土の中実で小型の土人形の半数以上に穴の大きなものが見られるということは、当時この特徴的な土人形が大坂で大量に出回っていたことは明らかである。現在までのところ、この特徴をもつ土人形の製作跡が発見されていないので断言はできないが、大坂かその周辺で製作された可能性がきわめて高いと思われる。

次にSK03の西部下層出土のものとそれ以外のものを比較すると、種別、成形方法、胎土および焼成方法に差は見られないため、大きな時期差はないと思われる。ただ、芥子面子が上層から2点出土しているが、下層からはまったく出土していないことから、上層と下層には時期差があると考えられる。下層出土の土製品も、陶磁器から検討された時期と同じ18世紀後半代もしくは、18世紀後半から19世紀のごく初めに位置づけられる。

今回はSK03から出土する土製品がどのくらいの割合で廃棄されているのか、土器類との比率を求

めてみた。SK03の西部下層出土の土器類(土師器や陶磁器)と土製品の比率を表してみると(図34)、土師器は3,481点で39.6%、陶磁器は5,088点で57.9%、土製品は226点で2.6%を占めた。このような出土状況が武家屋敷地にみられる傾向なのか、あるいは时期的な傾向なのか、またこの比率が多いのか少ないのかは、今回の結果だけではわからない。今後の調査との比較資料として掲げておきたい。

種 別	点数	割合(%)
土師器	3,481	39.6
陶磁器	5,088	57.9
土製品	226	2.6
合 計	8,795	100.0

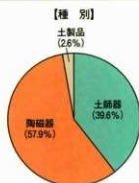


図35 土器類と土製品の組成比

2) 既往調査との比較(原色図版10、図版4)

今回の調査と既往の調査との比較を行うことにする。数量などの集計ができていないため統計的な比較はできない。そのため漠然とした比較になるが、全体の組成や特徴から検討をすることにする。

NW81-1次調査[大阪市文化財協会1984]出土のものは、小型で底部の穴が大きいものが多いこと、面子類が全く出土していないことから、今回出土の西部下層の資料と似た様相を示している。

NW93-4次調査出土のものは、中空で大型品が目立つ。大型品の胎土は細かく全体に橙白色を呈するもので、京都の伏見のものと思われる。また泥面子、芥子面子などの面子類が大量に出土している。

このように近接した調査区の出土資料であるが、陶磁器から検討された時期と同様に、土製品についてもNW81-1次調査のものは18世紀後半代あるいは18世紀後半～19世紀でもごく初め、NW93-4次の資料は、19世紀以降のものであると考えられる。

NW93-12次調査[大阪市文化財協会2004]では、18世紀末～19世紀の近世墓が検出されている。4基の墓に土製品が副葬されており、土鈴、おぼこ、猫、赤ん坊、天守閣、城門、猿がある。全体に胎土が細かくていねいに作られている。胎土が灰白色で赤ん坊が這っているモチーフは、大坂では出土例のないものである(註4)。またおぼこや天守閣は大型で器壁が厚く、胎土も灰白色を呈し、NW93-4次調査で出土した大型のものとまったく様相が異なる。そのため、日常使いのものとは別のものを副葬した可能性も考えられる。

3) まとめ

これまで土製品の时期的変遷は、18世紀後半頃より出土量・種類ともに増加する傾向があり、19世紀に入ると、面子類が爆発的に増加することも周知されている[安芸2001]。上述のように、今回の調査および既往の調査でも同様の傾向がみられ、2時期の特徴をもつ土製品が確認できた。

また遺構の性格が異なる資料の検討も行った。特に近世墓においては被葬者の身分や階層の差もあるため、他の出土例を待って検討していきたい。

このように遺跡の性格別の出土状況や、遺構に含まれる土製品の比率、時期の違いによる出土状況等を検討することにより、土製品からみた新たな近世大坂の様相が明らかになってくると考えられる。

註)

- (1)数量計測に当り、大手前大学大学院生の赤松和佳氏にいろいろとご教示いただき、計測も共同でしていただいた。ここに記して深く御礼申し上げます。また、当時使われていた数を推定する上では、異なる計測方法もあるが、今回は破片数を数えた。土師器は割れやすく、焼締陶器は割れにくいなど、それぞれの焼き物の特性があり、破片を数えて当時の使われていた数を類推することは無理であるが、どのような種類の陶磁器・土器がどのくらいの割合で使われていたかの大きな傾向をつかむことは可能だと思われる。
- (2)1940年代後半以降に出生し、大阪で子供時代を過ごした筆者の体験による。
- (3)財団法人京都市埋蔵文化財研究所 能芝 勉氏のご教示による。
- (4)能芝氏より、型の甘さなどから考えると京都のものではないと、ご教示を得た。
- (5)今回の報告では破片数を計測したが、広島藩蔵屋敷跡では個体識別法を用いて計数を行っている。

第Ⅳ章 まとめ

当地ではこれまでに、難波宮下層遺跡から難波宮、中世、豊臣氏大坂城期、徳川氏大坂城期、明治以降に至るまでの幅広い時期の遺構や遺物が見つかった。

今回の調査では、難波宮に関する遺構は検出しなかった。この主たる要因は、難波宮期の遺構面が後世に改変されているところが多かったことによるものである。

大規模な改変は、大きく分けて2つの時期に行われた。

第一は徳川氏大坂城期で、本調査で検出した土壌SK03のように土採りのための掘削によってなされた。この土採り穴は大規模で、広範囲に旧地表面が改変されている。土採り穴は、大阪医療センター構内の北側に主として分布しており、該当する箇所ではそれ以前に構築された遺構が受ける影響は甚大である。

第二は明治維新後に行われたものである。このことについては、『難波宮址の研究 第八』に詳しく述べられているが、再度触れておきたい。1871(明治4)年の大阪鎮台設置後に、当地は野戦砲兵第四連隊、歩兵第八連隊、歩兵二十連隊、歩兵三七連隊などの陸軍兵営地として変遷し、1945(昭和20)年の終戦を迎えた。これらの軍隊関係の施設建設にともなって敷地全体の整地工事がなされている。本来北から南へ傾斜していた地形の北側を削り、平坦あるいは緩やかな傾斜に変更しているようである。その結果、敷地北側は江戸時代より前の遺構の上部や遺構全体が削平されているものが多いのであろう。

整地後に軍隊関係の施設・建物が構築され、遺構の遺存状況はさらに悪化した。今回の調査でも、具体的に施設名が明らかになるものはないが、軍隊関係の工事による改変が多く見られた。

また、これらの軍隊関係の施設なども長期間継続したことから、建替えなどの変遷を経ており、改変をさらに複雑にしている。今回の調査区周辺では、建物以外にも第八連隊当時の訓練用の壕や第二次世界大戦時の歩兵三七連隊の防空壕や井戸も多く見つかっており、これらもやはり、それ以前に構築された遺構の遺存状況を悪くしている要因である。

ただし、北端部で古代と考えられる土壌SK01が検出されていることから、遺構の下部が遺存していることは想定される。

調査地の南半分では、江戸時代の土採り穴である大規模な土壌SK03を検出した。土採り穴と思われる大規模な土壌は、これまでの大阪医療センター構内の調査でも検出されていたが、出土遺物から埋積した年代は18世紀中葉あるいは幕末の時期が与えられてきた。

土壌SK03の全体の規模は不明であるが、253㎡以上であることを確認した。その深さは約2mであり、大規模な攪乱を受けているといえ、コンテナバットで100箱以上の陶磁器を主とする遺物が出土した。

これらの陶磁器類は、当時の生活を考える上で重要な資料である。

土壙SK03下層からの出土陶磁器は18世紀後半頃であり、上層は19世紀初頭であることが判明した。したがって、土探りは18世紀後半頃には終了し、その後その穴を埋めはじめて19世紀初頭には埋め終わったのである。

また、出土した陶磁器類を分類して統計処理することにより、半分以上を占める食膳具の使用実態が明らかになった。この成果は、当時の大坂における人びとの暮らしを知る上で重要な資料となる。

土人形をはじめとする土製品は、今回の調査で384点が出土したが、その大半は土壙SK03からである。19世紀になると爆発的に増加する面子類が極端に少なく、大型の土人形がほとんど出土しないことが特徴としてあげられる。その組成から、先行研究なども勘案し、陶磁器と同様の時期を示すことがわかった。また土人形の分析の結果、大坂で製作されたとこれまで推定されてきた一群が多数を占めており、あらためてその可能性がきわめて高いことが判明した。

NW81-1・NW82-1次調査で検出した土壙SK810163は、面積約315㎡と大規模なものであったが、遺物はブロックサンプリングして採集しており、今回のように多量の遺物を取り上げたものではない。また、後世の攪乱が甚だしく、あまり埋土が遺存していない土壙もあった。したがって、今回の調査は、大規模な土探り穴を埋積する際の時期幅や埋積完了時期を明らかにする上での貴重な資料が得られた。

一方、今回の調査では難波宮関係の遺構は検出しなかったが、遺構の保存状況が決して良好でなくとも、部分的に難波宮期の柱穴などが残存していることは過去の調査からも明らかである。今回、たまたま難波宮期の遺構を検出しなかったが、近接地で遺存している可能性は十分考えられる。

近年、難波宮東方官衙での発掘調査で重要な発見があったが、西方官衙に関しては、いまだ未解明な部分が多い。

大坂城跡、難波宮跡のさらなる解明にとって、これから大阪医療センター構内や周辺での発掘調査に寄せられる期待は大きい。

引用・参考文献

- 赤松和佳2008、「兵庫津遺跡における土器・陶磁器の様相から見た比較研究－近世期食膳具の分析を中心に－」：大手前大学史学研究所・編『兵庫津の総合的研究』、pp.57-95
- 安芸徳子2001、「5 遊び」：江戸遺跡研究会・編『図説 江戸考古学事典』柏書房、pp.218-225
- 2006、「東大構内遺跡出土の人形にみる一考察」：『東京大学本郷内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室、pp.503-513
- 大阪市文化財協会1984、『難波宮址の研究』第八
1992、『難波宮址の研究』第九
1999、「NW95-24次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.107-133
2000a、「国立大阪病院による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW99-23)完了報告」
2000b、『難波宮址の研究』第十一
2002、「大阪城公園東部地区の調査」：『大板城跡』Ⅵ、pp.36-74
2003、「OS87-14次およびその周辺の調査」：『大板城跡』Ⅶ、pp.299-320
2004a、『難波宮址の研究』第十二
2004b、『広島藩大坂蔵屋敷跡』Ⅱ
2007、『大和ハウス工業株式会社による建設工事に伴う難波宮跡・大板城跡発掘調査(NW06-2)報告書』
2008a、『難波宮址の研究』第十五
2008b、『野村建設工業株式会社による建設工事に伴う大板城跡発掘調査(OS08-1)報告書』
- 大阪城天守閣1984、『大阪城天守閣紀要』12 大阪城学術調査特集号
- 金子 智1996、「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」：『古代』101、早稲田大学考古学会、pp.144-160
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 白神典之1992、「堺播磨考」：『東洋陶磁』19号、東洋陶磁学会、pp.83-103
- 白石 純2002、「大板城出土瓦の胎土分析」：『大板城跡』Ⅴ、大阪市文化財協会、pp.63-68
- 2006、「大板城出土瓦の生産地推定－達磨窯との比較－」：『大板城址』Ⅲ、大阪府文化財センター、pp.438-444
- 積山 洋1994、「近世陶磁器の諸様相－消費地における18・19世紀の器種構成－」：『第6回 関西近世考古学研究会大会発表資料』関西近世考古学研究会、pp.1-13
- 趙 哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 難波洋三1992、「徳川氏大板城期の焙烙」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第九、pp.373-400
- 能芝 勉2003、「京都出土の近世火入・焔炉類について」：『四国と周辺の土器』Ⅱ－火鉢・焔炉類にみる流通と生活形態－、四国城下町研究会、pp.261-270
- 宮本佐知子2003、「大阪市内出土の金箔瓦」：大阪市文化財協会『大板城跡』Ⅶ、pp.339-366

宮本康治2003、「大坂における18・19世紀の陶磁器組成－大阪市北区中之島広島藩蔵屋敷跡の調査から－」：『関西近考古学研究』XI、pp.1－13

波辺 武1981、「豊臣氏大坂城の三の丸と惣構について」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第七 論考編、pp.137－160

あ　と　が　き

独立行政法人 国立病院機構大阪医療センター構内の発掘調査も、今回で25次となった。今回の調査では、難波宮に直接係わる遺構や遺物は見つからなかったが、徳川氏大坂城期の土採り穴と思われる大土壌が見つかった。

このような大規模な土壌はこれまでも見つかったが、今回のように土壌内の陶磁器などをすべて採集することはなかった。そうした意味で、今回報告された資料は、江戸時代における都市・大坂の陶磁器使用の実態を知るうえで貴重なものである。また、同時に土人形などの土製品も多数出土しており、基礎資料を蓄積するとともに、その分析の中から新しい知見も得ることができた。

この地は、難波宮の時代から現代に至るまで、各時代における大阪の中心地であった。今後とも、難波宮のみならず豊臣氏大坂城、徳川氏大坂城の実像を明らかにするように努めていきたい。

(趙 哲済)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- S SK03 7, 9, 11, 15, 33, 34, 43,
51, 52, 53, 54, 55, 57, 58
- か 瓦 1, 4, 5, 43, 45, 46
- き 京焼系陶器 23, 33, 51, 52, 53
- さ 堺搦鉢 28, 51, 53
- し 信楽焼 28, 51, 53
- せ 瀬戸美濃焼 26, 33, 34, 51, 52, 53
- た 丹波焼 28, 33, 51, 53
- つ 土人形 34, 35, 37, 54, 58
- と 土製品 34, 54, 55, 58
土採り穴 4, 9, 13, 57, 58
- な 軟質施釉陶器 30, 51, 53
- は 土師器 9, 30, 33, 49, 51, 53, 55,
56
- ひ 肥前磁器 15, 33, 34, 51, 52, 53
肥前陶器 28, 51, 52, 53
備前焼 28, 51, 53

〈地名・遺跡名など〉

- お 大坂城跡 2, 5, 46, 54, 58
- な 難波宮跡 1, 5, 58

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume X

January 2009

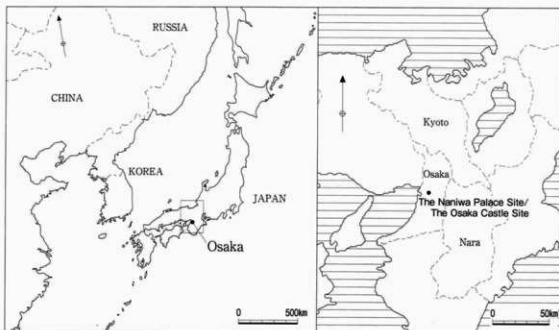
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SB: Building

SK: Pit



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Background and Progress of Reserch	1
S.1 Background and Progress of Reserch	1
1) Background of Reserch	1
2) Progress of Reserch	2
S.2 Preceding Investigations of Surrounding areas	4
1) Investigations on the premises of National Hospital	4
2) Investigations of the Naniwa Palace Site	5
3) Investigations of the Osaka Castle Site	5
Chapter II Investigation Results	7
S.1 Stratigraphy	7
S.2 Features	9
1) Features of the Ancient Periods	9
2) Features of the Tokugawa Period	9
3) Features of the Meiji Period and others	13
S.3 Remains from the Reserch area	15
1) Ceramics and Pottery	15
2) Small figure and Clay objects	34
3) Roof tiles	43
Chapter III Discussion of Artifacts	51
S.1 Quantitative investigation of the Remains	51
1) Introduction	51
2) Classification of Ceramics and Pottery	51
3) Classification based on the directions	52
4) Conclusion	53
S.2 About Small figure and Clay objects	54
1) Investigation Results	54
2) Comparison with the Past investigations	55
3) Conclusion	55
Chapter IV Conclusion	57
References and Bibliography	59
Postscript	

Index

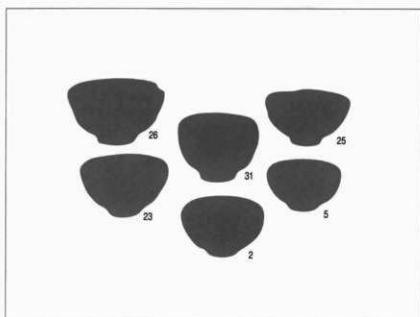
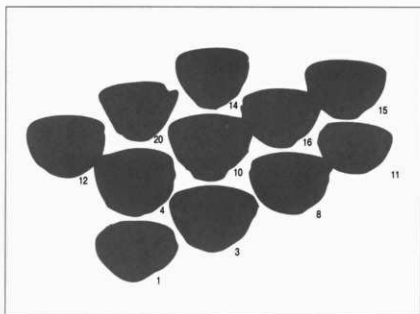
English Contents

Extract

報告書抄録

ふりがな	おおさかじょうあと10							
書名	大坂城跡X							
編著者名	藤田幸夫・川村紀子・黒田慶一・宮本佐知子・市川 創							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2009年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道庁番号					
おおさかじょうあと 大坂城跡	おおさかじょうあと 大坂市中央区 法円坂二丁目	27128	—	34° 40′ 50″	135° 31′ 24″	20071106 ～ 20080125	786㎡	国立病院機構大 阪医療センター の施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
難波宮跡・ 大坂城跡	都城	古代		土壇		土師器		
	城郭	江戸時代		土採り穴		陶磁器・瓦・土製品		
		明治時代		建物基礎				
要 約	本書は、独立行政法人 国立病院機構大阪医療センター内で行われた、難波宮跡・大坂城跡発掘調査の成果を報告するものである。 調査では、難波宮以前の土壇と、江戸時代の大規模な土採り穴を検出した。 土採り穴の埋土からは、陶磁器や土製品、瓦などの多量の遺物が出土した。これらの遺物は土採り穴をゴミ捨て穴として転用した際に廃棄されたものであり、当時の大坂の生活を考えるうえで貴重な資料である。 本報告では、出土陶磁器を数量化して消費地大坂での使用実態を追及するとともに、土人形をはじめとする土製品の分析を行った。							

原 色 図 版

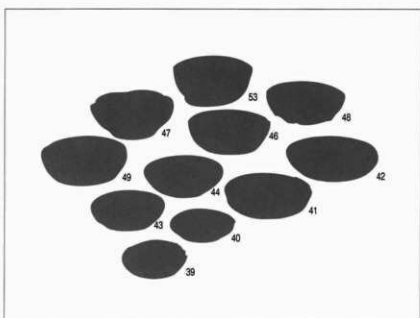
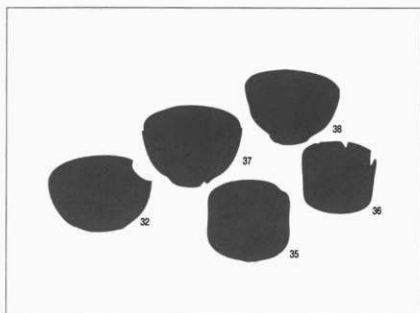




肥前磁器 碗(1)



肥前磁器 碗(2)

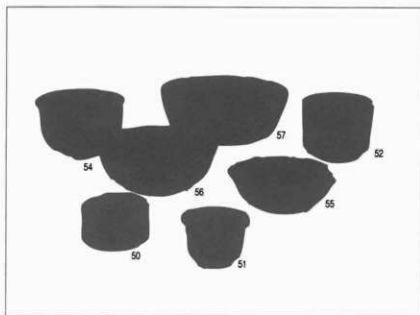




肥前磁器 碗(3)



肥前磁器 皿

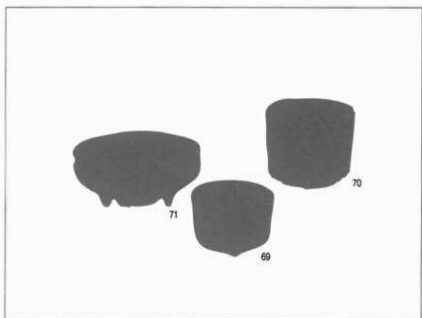




肥前磁器 鉢



肥前磁器 小杯・猪口

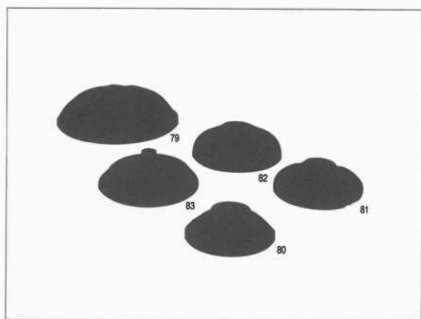
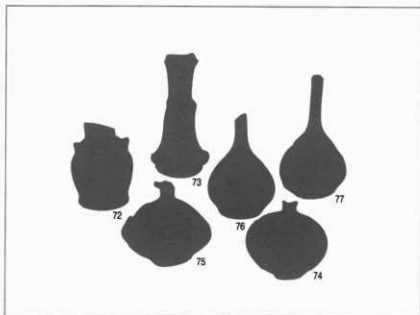




肥前磁器 仏飯器



肥前磁器 香炉

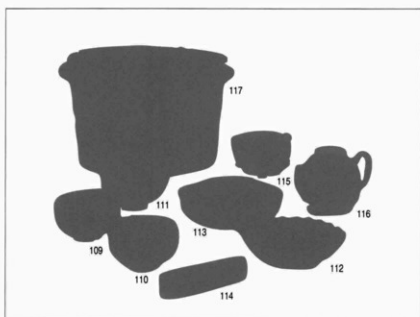
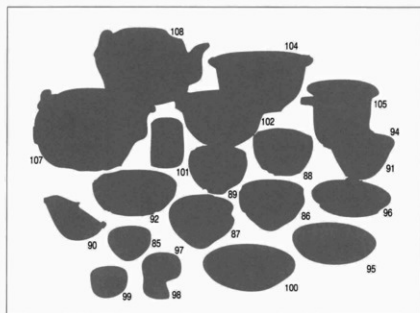




肥前磁器 瓶



肥前磁器 蓋

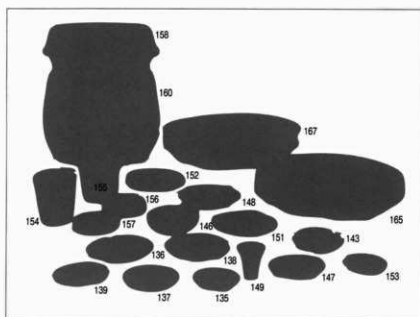
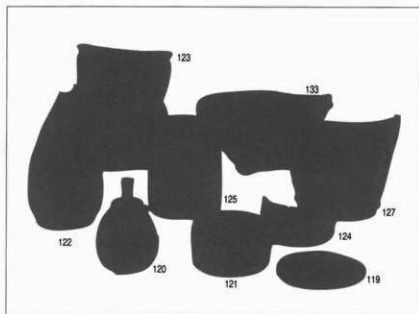




京焼系陶器



瀬戸美濃焼陶器





焼締陶器(備前焼・丹波焼・堺撞鉢)



土師器・軟質施釉陶器



土製品類集合



土人形(人物)



土人形(動物)



飯事道具



箱庭道具



難波宮跡(NW81-1次)出土の土製品類



難波宮跡(NW93-4次)出土の土製品類

圖 版



大土壙SK03掘削前(南から)



大土壙SK03掘削後(南から)



SK03西アゼ東壁北半部
(西から)



SK03西アゼ東壁南半部
(西から)



SK03西アゼ西壁部分
(東から)

SK03中央アゼ西壁
(西から)



SK03東アゼ西壁
(西から)

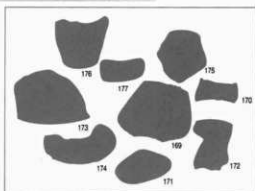


SK03遺物出土状況



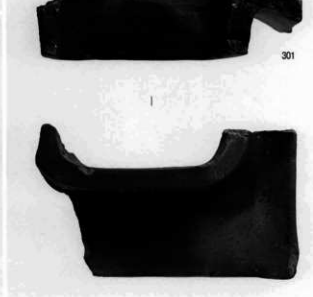
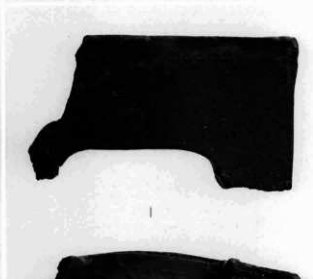


SK03上層出土の陶磁器・土器類



A: 4号墓
B・C: 8号墓
D・E・F: 11号墓
G: 22号墓

近世墓出土の副葬品(NW93-12次出土)



大坂城跡X

ISBN 978-4-86305-011-2

2009年1月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume X

January 2009

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume X

January 2009

Osaka City Cultural Properties Association